

水の循環と子どもの遊びからみる

自然と社会とのつながりとその価値について

—多摩川流域の自然環境保全に向けた流域連携の可能性に向けて

2021年

土肥 真人

共同研究者

清野 隆

吉田 祐記

目次

1. 研究の概要.....	1
1-1. 背景と目的	1
1-2. 研究の方法	1
1-3. 研究の対象	2
2. 各水辺の活動の現状と特徴.....	4
2-1. 調査の概要	4
2-2. 各水辺の活動の現状・特徴	4
2-3. 本章のまとめ.....	33
3. コロナによる水辺の活動の変化	35
3-1. アンケート・ヒアリング調査の概要	35
3-2. コロナによる各水辺の活動の変化.....	35
3-3. 本章の調査まとめ.....	39
4. 水辺の風景と価値の同時多元的共有—多摩川オンラインシンポジウム実施	40
4-1. 多摩川オンラインシンポジウムの概要.....	40
4-2. シンポジウムの波及効果.....	48
4-3. 本章の調査まとめ.....	48
5. 考察とまとめ	49
5-1. 考察.....	49
5-2. まとめ.....	49
参考文献	51

1. 研究の概要

1-1. 背景と目的

国土交通省の「水辺の楽校（1996～）」、「子どもの水辺（1999～）」事業は、環境教育の推進を目的として、国土交通省の主導のもと開始した事業である。しかし市民活動の活発化等を背景として、制度的な変更が加えられ、「行政による河川の一括管理」から「住民による河川のマネジメント」へと移行することを可能にした¹。

現在、多摩川流域のそれぞれの水辺空間では、同事業を契機として多様な主体間の連携による管理と活用が広がりを見せている²。一方で、流域全体の広域的なネットワーク形成への試み³、すなわち域内の鳥や魚、水生植物・昆虫等の生態系や水質・水資源管理といった流域全体のマネジメントについては、一部にその試みがみられるものの、地域住民の日常的生活や風景と具体的に結び付いておらず、その持続性や展開に困難を抱えている。

この課題に対して本研究は、多摩川の水の循環と子どもの遊びに着目し、「水辺の楽校」で繰り広げられる活動を、水の循環や生き物の生態系のつながりの上に位置づけなおし、活動そのものの魅力や価値を捉えなおすことを試みる。ここから、日常生活の行動の変化を促すこと、同時にコミュニティ、都市、流域といったスケールをつなぐ広域的なビジョンをボトムアップから導き、流域連携の可能性を探りたい。したがって本研究は、次の3点を具体的な目的とする。

- 1) 水の循環と遊びに着目して、多摩川の自然とコミュニティ・都市がどのような回路でつながっているのかを明らかにする
- 2) 上記のつながりが生み出す価値を活動主体とともに確認し同定する
- 3) 「つながり」と水辺の「価値」を流域全体で共有する場を作りながら、流域単位の連携の可能性を考察する

1-2. 研究の方法

本研究の方法は、「エコロジカル・デモクラシー」の都市デザインの考え方と方法論を用いる⁴。このデザイン手法は、「自然と社会を同時に一緒に考え」、「スケールを上下し」、「人々の価値観に変化を促す」というものであり、自然を都市に呼び込み、人々の心の内に自然の喜びを呼び起こすことを目的とし、それを引き起こす都市デザインを実践するものである⁵。このエコロジカル・デモクラシーの考え・方法論と共に、調査研究全体としては参加型アクションリサーチの方法論⁶を援用して、本研究の対象とする多摩川流域内の「水辺の楽校」および「子どもの水辺」事業等において、いかに個々の子どもの遊びの活動が鳥や魚、植物

¹ 参考文献1) より

² 参考文献2) より

³ 参考文献3) より

⁴ 参考文献4) より

⁵ 参考文献5) より

⁶ 参考文献6) より

や昆虫たちの生息地に触れ、周囲の社会（学校、町内会、自治体、農家、企業等）を巻き込み、多摩川の水の循環の中で交差しているのかについて、水辺の活動に関わる一主体として介入しながら明らかにする。はじめに参与観察による調査を元に、一つひとつの活動を人々の喜びや水循環の上に整理し位置づけなおしながら（第2章）、さらに今般の新型コロナウイルス感染症拡大の影響による水辺の活動の変化も捉える（第3章）。この変化を踏まえた上で、水辺の活動の価値を活動主体と一緒に考え、共有することのできる場づくり（後述する、多摩川オンラインシンポジウム）を企画立案、計画・実践し（第4章）、同企画の評価および水辺の活動主体の意識変化を捉え、多摩川流域連携の可能性について考察する（第5章）。

具体的には、次のとおり調査研究を進める。

①多摩川の水辺の活動一覧を作成し、それぞれの取組みが、どのように「コミュニティ・都市の暮らし」と「身近にある生き物の生態系・水の循環」とをつないでいるかを、活動への参与観察から把握する。ここで把握した要素を、地図上で示し、そのつながりの形態を可視化する。それぞれの活動を水の循環や生態系のつながりの上に位置づけなおし、活動そのものの魅力や特徴を捉え、流域全体における活動の価値を考察する。（第2章）

②上記で得られた成果を、活動主体と一緒に共有・検討する。先に述べたように、今般の新型コロナウイルス感染症拡大を受けて各水辺の活動状況・内容は、現在大きく変化している。そのため、まずはコロナ感染症の拡大による活動状況・内容の変化を捉えながら、本調査研究で当初計画していた参与観察・交流会実施の方法を見直し検討する。（第3章）

③上記での検討を元に、水辺の活動の価値を活動主体と共に考えるためのオンラインシンポジウムを計画・実施する。同シンポジウムにおいては、同時多角的に各水辺の活動風景を共有しながら、コロナ後の現在の活動状況や地域の子どもの様子、そして多摩川で遊ぶ未来の子どもたちに向けたメッセージを交換しあう。このオンラインシンポジウム実施後のアンケート調査に基づき、水辺の活動主体の意識変化を捉え、シンポジウムを評価しながら、流域連携の可能性について考察を行う。（第4章および第5章）

1-3. 研究の対象

本研究を行うに当たり、水辺の楽校および子どもの水辺事業として登録されている多摩川流域の21事業を対象として⁷、その活動の継続状況を確認し、多摩川の水辺の活動⁸の一覧を作成した（表1）。本研究では、現在まで活動を行う20の活動団体⁹を対象とする。

⁷ 水辺の楽校（国土交通省 HP）：https://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index045.html、子どもの水辺（河川財団 HP）：<https://www.kasen.or.jp/mizube/tabid160.html>、を元に抽出。

⁸ 本研究の目的と照らして、「水辺の楽校」または「子どもの水辺」として事業登録されていない多摩川の水辺の活動も調査対象として含めている。

⁹ 現在は活動を休止している表1のNo9 滝合水辺の楽校、No12 いなぎ水辺の楽校の2団体を除く20団体

表 1-1: 多摩川における水辺の活動団体一覧(本研究では、現在まで活動を行う 20 団体を対象)

No	市町村	名称	継続状況	水系	河川	活動頻度	活動
1	北都留郡小菅村	多摩川源流大学	○	多摩川	小菅川源流		・他の水辺の活動団体の受け入れ等を行う
2	青梅市	おうめ水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	—	・7月: カヤック体験 ・7-9月?: ガサガサ など
3	あきる野市	平井川こどもの水辺	○	多摩川	平井川	毎月(自然観察会)	・8月: いかだを作って川下り ・10月: 平井川ハイキング ・11月: やちよう観察 ・12月: 川のそうじ&すいとん など
4	福生市	福生水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	約月1回(4月~2月)	・5、12月: バードウォッチング ・6、9月: 魚のつかみ取り ・8月: いかだで冒険、多摩川で遊ぼう など
5	昭島市	あきしま水辺の楽校	○			年10回程度(5月~9月)	・5月: 初夏の草花調査(総合学習) ・7-8月: いかだ、カヌー教室(メインイベント) など
6	立川市	たちかわ水辺の楽校	○	多摩川	残堀川	—	・7-9月: 多摩川探検(水干、化石) ・12月: ファミリーオリエンテーリング など
7	八王子市	八王子浅川水辺の楽校	○	多摩川	浅川	—	・7月: ガサガサ ・8月: ウグイの放流 など
8	日野市	浅川潤徳水辺の楽校	○	多摩川	浅川	—	—
9	日野市	滝合水辺の楽校	×			—	(数年前までやっていたが、現在は取組みなし。2019.0404 確認)
10	多摩市	多摩市水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	—	・6月: カヌー体験 ・夏: サマーキャンプ(源流) など
11	府中市	府中水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	年10回程度(6月~2月)	・6、9月: 投網、魚つかみどり体験 ・7-8月: 自然観察、沢あるき など
12	稲城市	いなぎ水辺の楽校	×	多摩川	多摩川	—	(現在は取組みなし。2019.0404 確認)
13	調布市	調布水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	年4回程度(5-1月)	・1月: バードウォッチング ・5月: 田植え ・11月: 自然観察会&イモ煮 など
14	川崎市	かわさき水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	約月1回	・7-8月: 投網体験・川流れ、湧水で川遊び ・9-10月: 魚つかみ、魚つり など
15	狛江市	狛江水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	毎週	・通年: 清掃活動、生き物観察 など
16	世田谷区	きぬたまあそび村	○			毎週	・きぬたま活動日(月・水・金・土) ・ツリーハウスPJ ・プレーワーカーと水辺の遊び など
17	世田谷区	せたがや水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	約月1回	・2月: 子どもシンポジウム ・3月: マルタウグイ産卵場づくり ・5-10月: ガサガサ など
18	川崎市	とどろき水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	約月1回(4月~2月)	・10-11月: 二子の渡しまつり10月、体験11月 など
19	大田区	うのき水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	約月1回(4月~2月)	・4月: 春の鳥と草原の観察会 ・5月: 川崎の大師河原干潟観察 ・6-7月: ガサガサ など
20	大田区	やぐちのわたし水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	—	
21	川崎市	だいし水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	毎週	・5-11月: 干潟観察会(3校合同・5月) ・8月: 自由研究 ・9月: ハゼ釣り など
22	大田区	羽田水辺の楽校	○	多摩川	多摩川	約月2回	・4-9月: (隔日) 干潟の定例観察会、清掃・保全活動 ・夏: サマースクール など

2. 各水辺の活動の現状と特徴

本章では、多摩川の各水辺の活動が、どのように「コミュニティ・都市の暮らし」と「身近にある生き物の生態系・水の循環」とをつないでいるかを、活動への参与観察から把握する。また調査によって把握した内容を地図上で示しながら、活動間や地域主体とのつながりの形態を可視化し、流域全体の視点から活動そのものの魅力や特徴を捉え、活動の価値を考察する。

2-1. 調査の概要

以下の調査概要（表 2-1）に示すように、各水辺の活動への参与観察を行った。

表 2-1:各水辺の活動への調査概要

調査期間	2019年4月～7月
調査方法	各水辺の活動への参与観察（活動への参加と聞き取り調査）
調査項目	(1) 当日の活動状況、(2) 地域の子どもの様子、 (3) 地域の自然環境、(4) 活動主体の概況（発足の経緯や活動展開プロセス、運営主体など）および関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携
調査実施団体	14団体（うち活動の参与観察12団体。ヒアリング調査のみを行った2団体を含む）
※各水辺の活動やイベントに合わせた参与観察であるため、各調査項目について十分な調査ができなかったケースがあり、またスケジュール等の調整ができずにヒアリング調査に留まるものや訪問できなかった団体もあった。	

2-2. 各水辺の活動の現状・特徴

以下から、調査を行った各水辺の活動団体について示す。それぞれの調査概要・内容は表中に整理し、各水辺の活動の現状を示す。

(1) おうめ水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.2】

表 2-2: おうめ水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	おうめ水辺の楽校
活動内容・イベント	昆虫探検隊
調査日時	2019年6月1日(土) 09:15-12:00
天候	晴れ時々曇り、じつりと暑い
主なヒアリング対象者	青梅・多摩川水辺のフォーラム代表・活動メンバー
活動参加者	吉田
活動場所および 関連主体の位置	 <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> 青梅市 青梅市立河辺小学校
(1) 当日の活動状況 (ヒアリング調査の概況)	
<ul style="list-style-type: none"> ・おうめ水辺の楽校では初めての試みである「昆虫探検隊」の活動に参加。近隣の河辺小学校の生徒を中心として、およそ100名の参加者が集まっていた。普段の水辺の楽校の活動(ガサガサや魚とりなど)には、200~300名ほど参加者が集まるそうで、今回はそれと比較して参加者が若干少ない様子。 ・今回のイベントの主催である「青梅・多摩川水辺のフォーラム」代表の挨拶の後、河辺小学校の先生3名、杉並区からの講師3名の紹介、ラジオ体操、記念撮影をして河川敷の拠点に移動した。 ・河川敷近くの拠点では、講師の宮内さんから、虫の捕まえ方のレクチャー、採取場所の範囲や注意事項の説明。参加者は、虫取り網とカゴ、ジップロック、昆虫リストを持ちながら、大まかに3エリア(①先戸池、②バナナ仕掛け、③球技場近く)に分かれて、1時間程、昆虫の捕獲を行った。 ・採取した昆虫は、ジッパー付きの袋に種類別に入れて、たまったら河川敷の拠点にあるケースに移す。大きなチョウやトンボは専用のネットケースに入れて観察した。 	
	
(2) 地域の子どもの様子	
<ul style="list-style-type: none"> ・めずらしい虫や、とても大きなカマキリ、色鮮やかなアゲハ蝶、か細いけれどキレイなイトトンボを捕まえた子どもは、目を輝かせて捕まえた昆虫を見せてくれた。昆虫を捕まえた小学生は、どこにいたのか、どうやって見つけて、どう捕まえたのか、とても自慢げに話しかけてくれることがとても印象的だった。 ・子どもだけではなく、親も、特にお父さんは、昔のカンを頼りにしながら昆虫探しに夢になっていた。一番熱心に昆虫を見ていたのは講師の宮本さんで、色々な角度から捕まえた昆虫一匹一匹を撮影していた。 ・青梅・多摩川フォーラムの事務局の方は、元々は参加者として子ども連れで参加。次第に子どもが大きくなるにつれてスタッフ側に回るようになり、今では事務局を支えている、とのこと。今後の課題は、参加できない、しない親子に今後どうやって参加してもらうか、とのこと(青梅・多摩川フォーラム事務局)。 ・参加者の中には、児童虐待の保護を行う施設の児童も来ていた。そのためイベント風景で子どもの顔が映っている写真はSNS等に使用しないよう、青梅・多摩川フォーラムのウェブページでの写真や動画は、その子どもたちが入 	

らないように、一つひとつチェックをしているとのこと。

(3) 地域の自然環境

・活動場所の河川敷は、以前は泥などなく、砂地・砂利ばかりのところだったが、近年では治水、土止め等のために植林されたニセアカシアが繁茂する風景が広がった（活動メンバー）。

・杉並区では絶滅しているような珍しいチョウ（ヒメウラナミジャノメ）が、ここでは生息している（講師）。

・活動場所の先戸池は、かつて多摩川の本流が流れていた場所。現在でも年によっては本流が流れる場合（2008年等）があるが、基本的には池になっている。池であっても湧水箇所があり、水はとてもキレイ。地形の変化を感じることができる場所であり、環の変化を感じて確かめることのできる先戸池は、水辺の楽校の活動にとって貴重な場所。

（今回観察した生き物は以下の通り）

バッタ、キリギリスの仲間：オンブバッタ、トノサマバッタ、ヒナバッタ、ショウリョウバッタなど。チョウの仲間：アゲハ、キアゲハ、キタキチョウ、キタキチョウの幼虫、モンシロチョウ、ヤマトシジミ、ヒメウラナミジャノメなど。トンボの仲間：シオカラトンボ、クロイトトンボなど。先戸池の周りに生息。ハチ・アブの仲間：ハナアブなど。ハネの数でアブ（2枚）とハチ・トンボ（4枚）を見分ける。今回の調査ではアブはいたが、ハチは見当たらなかった。その他：コクワガタ、カエル、テントウムシ、ハムシ、カメムシなど。バナナを腐らせた仕掛けに、コクワガタなどの虫が集まっていた。



(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

・2005年に策定した青梅市環境基本計画における12のアクションプランの内の一つが「多摩川等の水辺の保全に取り組む市民団体の設立と「水辺の楽校」の創設」であり、ここから青梅・多摩川水辺のフォーラムが創設され、水辺の楽校が開校した。※青梅市環境基本計画：https://www.city.ome.tokyo.jp/kankyo/kankyo_kihon.html

・初めて水辺の楽校の活動を広報した時には、参加者が10人ほどしか集まらなかった。子どもの参加者が少ないのは、親の興味関心が低いことの表れ、ということで、まずは親や学校の先生といった大人に、活動を知ってもらうことを意識していた。

・当時の河辺小学校の校長先生が自然派の人で協力してもらい、参加者が増えた。最近では母親だけではなく、父親も参加してくれるように。川に入る際に、親御さんにも“安全のため”に入ってもらい、親も川の楽しさに気付くきっかけにしている。

・おうめ水辺の楽校は、主に以下の4団体を中心に運営されていることを事前に調査した。

(1) 青梅・多摩川水辺のフォーラム：2006年5月に発足した市民団体。子どもたちの自然環境体験や環境学習活動の支援と推進を行う。団体 URL：<http://ome-mizube.org/>

(2) 美しい多摩川フォーラム：2007年7月に発足した青梅信用金庫のCSR事業の受皿となる団体。経済、環境、教育文化の3つを活動の柱として、「美しい多摩川100年プラン」を策定し（2008年5月）、同計画の推進を行う。団体 URL：<http://www.tama-river.jp/index.html>

(3) 特定非営利活動法人奥多摩川友愛会：2006年9月に発足したNPO法人。親子でのアユ稚魚の放流、魚釣り教室、環境調査を行う。団体 URL（ブログ）：https://blogs.yahoo.co.jp/t_yuaikai

(4) 霞川くらしの楽校：荒川水系・霞川の「子どもの水辺」（2005年11月登録）の運営団体。活動エリアは、霞川源流から金子橋および今寺天皇塚水田で、源流は多摩川・河辺の河川敷に近い。

URL（参考）：<https://chirashi.ne.jp/main/shops/index/1348>

・今回のイベントでは、上記4団体間での協働や役割といったところを調査することができなかった。

・一方で、河辺小学校の先生や河辺小PTAがスタッフとして今回のイベントに参加していた（スタッフは総勢11名）。河辺小の副校長も来ており、同小学校との連携が取れている印象を受けた。

(2) 平井川子どもの水辺【水辺の活動一覧 No.3】

表 2-3: 平井川子どもの水辺・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	平井川こどもの水辺
活動内容・イベント	水辺の生態調査
調査日時	2019年4月17日(水) 9:30-12:30
天候	くもり、心地よい気候
主なヒアリング対象者	平井川こどもの水辺・川原で遊ぼう会 代表 伊那石の会・秋川流域ジオの会会長
活動参加者	吉田、増田
活動場所および 関連主体の位置	<div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="flex: 1;"> <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 東京都西多摩建設事務所(あきる野工区) ● あきる野市立東秋田小学校 ● あきる野市立多西小学校 ● あきる野市立西秋田小学校 ● あきる野市立屋城小学校 ● あきる野市立南秋田小学校 ● あきる野市立草花小学校 ● あきる野市立一の谷小学校 ● あきる野市立前出小学校 ● あきる野市立増戸小学校 ● あきる野市立五日市小学校 </div> <div style="flex: 2;">  </div> </div>
(1) 当日の活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ・平井川こどもの水辺では、水辺の生態調査と生き物観察会の二つの活動を主に実施している。 ・生態調査の活動は、菅瀬橋周辺に加え、平井川を数百メートル下流にある草花公園のはるか橋付近の二つのエリアで、交互に毎週調査を実施している。調査時間は約2時間。 ・今回の訪問では、平井川の菅瀬橋周辺においてダビドサナエ(トンボの一種)の羽化ガラを探す調査に同行。ダビドサナエ18個体、羽化中3個体、アサヒナトンボ1個体を確認。中には羽化したてトンボの姿を観察することができ感動。 ・今回の調査エリアは、普段は子供の遊び場とはなっておらず、子どもの遊び場は、草花公園周辺。 ・今回調査したダビドサナエは、サナエトンボ科のトンボの一種で日本特産種。春にあらわれるサナエトンボの中では、比較的普通に見られる種であるが、一緒に調査したメンバーによるとトンボの数は護岸工事や周辺環境の宅地化の影響で減少しているとのこと。昔は数百個体確認できたこともある。
	<div style="display: flex;">   </div>
(2) 地域の子どもの様子	<p>ー(今回の調査は生態調査のため、子どもたちの参加を観察できなかった)</p>
(3) 地域の自然環境	<ul style="list-style-type: none"> ・以前は水田が多かったが、宅地化が進んでいる。以前は水組合の管理のもと、用水路が活用されていたが、現在で

は利用されておらず、用水路跡だけが残っている。用水路が使われなくなったことで生態環境もかなり変化してしまった（平井川子どもの水辺・メンバー）。

・また生体調査地の周辺には、大きな屋敷があったが、敷地が分割されて建て売り住宅となり、その際に護岸に面していた雑木林が伐採された。かつては田んぼであった河川敷周辺はオギが生い茂り、カヤネズミの生息地であったが、盛り土がされたことにより、現在は一部がのこっているのみ。

・河川敷の管理用通路が整備されており、住民も遊歩道として活用しているが、道路課と河川課で調整が行き届かず、一部進入禁止となっている。

・護岸工事の際に、河川敷の草原が刈られた後、自然保護関連の住民の意見により、多摩川に生息するチガヤを植えるという試みがなされた。

・平井川の河川敷が生息地となっている「カヤネズミ」は日本で最小のネズミ（胴長約6cm）で、主に休耕田や河川敷、草原に生息し、オギ、ススキ、チガヤなどのイネ科の葉を利用して巣を形成。近年、河川工事や開発の影響で生息地が減少。環境省や都道府県の「レッドデータブック」に掲載されている。

・平井川の護岸工事の計画時には、河原で遊ぶ会のメンバーや市民らがカヤネズミ等の生息環境の保護や、護岸工事により河川流量が増加することで生じる生態環境への悪影響を最小限とするための主張を行い、工事の整備区域を分割して段階的に工事を行うこととなった。以前は、地元住民にとってカヤネズミはよく見慣れた生物であり、保護するという意識が希薄だった。

（今回観察した植物・生き物は以下の通り）

野生のためぎ、カワセミ、ハクセキレイ、ダイサギ、アオサギ等。またカジカガエルは声や、赤ネズミが食べたくるみの跡も観察。オオタカの営巣地が近くにある、とのこと。

・あきる野市は生物多様性条例を制定するなど、自然保護を積極的に推進している。郷土の森づくりを進める「森林レンジャー」といった特徴的な取り組みも見られる。が、平井川子どもの水辺の活動との関係や連携はないとのこと。

（参考：生物多様性あきる野戦略：<http://www.city.akiruno.tokyo.jp/0000005507.html>）

（4）活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

・平井川子どもの水辺の会員数は40名程度で、調査会には平日活動可能な2、3名が参加。観察会は休日実施して3、4名が運営側として参加しており、団体の実働は10名程度。

・「川原で遊ぶ会」は4名の女性で設立した任意団体であり、今回インタビューしたのはこの初期メンバーの方。

・水辺の利用に関しては、農協、漁協、自治会とは上手くいかないこともある（平井川子どもの水辺・メンバー）。自然保護を重視するメンバーや市民らと農業従事者では、カヤネズミの生息地となる河川敷のオギに関する取扱いが異なる。自然保護のメンバーは、カヤネズミの生息地保全のためにオギの草地を残そうとするが、営農者や周囲の住民の中にはカヤネズミの環境保全に関心が低い方もおり、オギを刈りきれいな河川敷とすることを主張するという。

・以前、自治会の住民が自主的に河川敷の草刈りをした際、カヤネズミの生息地が減少してしまい、その後、市が草刈り規制のために看板を設置したというケースも。

・長く住む住民の中には農家の方が多く、自治会等の地域組織での主張と重なるのではないかと推測される。

・「平井川こどもの水辺」の主な協力組織は、あきる野市、市教育委員会、川原で遊ぶ会、東京都西多摩建設事務所。なお、平井川は一級河川ではないため、国交省とは関係をもたない。

・団体設立当初の活動では、都の職員、市の課長等も参加していたが、近年では関係は次第に希薄になっている。しかし市の職員等は、今でも年に一度の協議会に参加してもらい協力を得ている。

・地元の小中学校とは、教育委員会とつながっているため関係は良好。観察会等の活動を実施する際には、全校にチラシを配布している。小学校は約10校。この内活動場所近くには2校がある。

・市との関係も良好であり、草花水坊倉庫の一角をもらい、ライフジャケット等の備品や資材を保管している。

・水辺の楽校関連では、狛江水辺・福生水辺（自然環境アカデミー）に協力いただいたことがある。狛江水辺の楽校では流域連携を意識して、横のつながりをつくろうとしていた。その中で以前は、他の水辺の楽校との連携活動として、自由研究の発表会をしたことある。しかし距離的に遠いため、現在は参加しておらず、継続して参加するのは難しそう、とのこと（平井川子どもの水辺・メンバー）。自分のところをやるだけで精一杯。

(3) 福生水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.4】

表 2-4: 福生水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	福生水辺の楽校
活動内容・イベント	4/14: ヨモギ団子づくり 5/12: バードウォッチング、秘密基地づくり
調査日時	2019年4月14日(日) 9:00-12:00 2019年5月12日(日) 9:00-16:30
天候	4/14: 晴れ、あたたかい天気 5/12: 朝は曇りがち。徐々に日が出てきて、日中はかなり暖かい日
主なヒアリング対象者	NPO 法人自然環境アカデミー・メンバー 福生市役所生活環境部環境課環境係・担当者
活動参加者	4/14: 吉田、沖田 5/12: 吉田、増田、沖田
活動場所および 関連主体の位置	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1;"> <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> 府中市立久崎小学校 府中市立四谷小学校 府中市立武蔵台小学校 NPO法人自然環境アカデミー 福生市立福生第五小学校 福生市立福生第七小学校 福生市立福生第一小学校 福生市立第二小学校 </div> <div style="flex: 2;">  </div> </div>
(1) 当日の活動状況	
<p>(4/14: ヨモギ団子づくり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福生水辺の楽校の開校式イベントである「ヨモギ団子づくり」の活動を訪問。58名の参加登録があり、今回のイベントには、たくさん親子連れで賑わっていた。 ・福生市担当者の司会で活動が始まり、水辺の楽校校長からの挨拶、続いて自然環境アカデミーのメンバーから今回のイベントのオリエンテーション。河川敷の方へ移動して、線路高架下付近のエリアでヨモギ探しを開始。はじめにヨモギとヨモギに良く似た毒性のある植物との見分け方、ヨモギの摘み方についてレクチャーを受ける。 ・ヨモギを摘みの傍らで、子どもたちはカマキリの卵を見つけて楽しんでた。 ・摘んだヨモギはバケツに入れて運び、鍋で1-2分茹でて、すり鉢でつぶす作業に。この作業を子どもたちが熱心にゴリゴリ時間をかけて行う。子どもも大人も楽しんで、白玉粉と合わせて、水を少しずつ加えながら、手でこねる。茹で上がった団子はお好みで、きな粉と餡子を添える。ヨモギの程よい苦味が後から来る感じでとても美味しかった。 ・参加者の親御さんはマイ箸、お皿、水筒を持ってきている人が大半。半分くらいは、何度か水辺のイベントに来ているようだ。 <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1;"> <p>(5/12: バードウォッチング、秘密基地づくり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・午前はバードウォッチング、午後は秘密基地づくりの活動に参加。午前の部の参加者は、子ども15人、大人10名、スタッフ5名。本日の活動のスタッフには、福生水辺の楽校を運営している「NPO 法人自然環境アカデミー」のメンバー数名、福生市生活環境課の職員2名。 ・子どもの参加者は主に「福生市立福生第五小学校」の子供が多く、「第七小学校」の子供が数名、低中学年が大勢いた。前回の活動(よもぎ団子づくり)以降、小学校への活動告知をしており、午前午後合わせて50名近くの応募があった。 </div> <div style="flex: 1;">  </div> </div>	

・バードウォッチングでは、カワラヒワの鳴き声を背にして、本日のガイド（自然環境アカデミー・メンバー）より双眼鏡の使い方の説明の後、多摩川中央公園の河川敷に群生するニセアカシアが咲き誇る小道をめぐり、中々さえずる姿をみせてくれないウグイス、ここかしこから現れるシジュウカラなどの野鳥観察を行った。その後に、鉄道の橋脚下にある石場の河川敷へと場所を変え、アオサギとダイサギが仲良く隣り合う様子、カワウが水面をかけ飛び立つ姿、空高く青空を横切るカルガモの飛翔姿、そして芋虫を加えて巣に運びシジュウカラの給餌の様子と出会うことができた。



・午後の部では、ハルジオンが生い茂る草地（約 15m×10m）にて秘密基地づくりを行った。初め、子どもの腰の高さまで伸びた野草を踏みならして整地し、シーソーチームとベンチづくりの 2 チームに分かれて作業を開始。倒木を活用したシーソーづくりでは、短い丸太を脚部にし、長めの丸太をその上において完成。子どもたちが一生懸命に丸太を持ち運ぶ姿が印象的であった。もうひとつのチームはニセアカシアを伐採し、子どもだけでなく大人も入り交じり、一心不乱に鋸を挽いて様々な長さの丸太に切断して、ベンチづくりを行った。



(2) 地域の子どもの様子

・3-5 歳くらいの年齢から小学生までの子どもたち中心に参加がみられる。中には車で来た、という子もおり、やや遠方からも参加がある様子。毎回参加している子どもたちもおり、福生市の職員の方と子どもたちは仲良く楽しそうに活動していたのが印象的。

・水辺の楽校のスタッフの中には、現在の水辺の楽校校長の息子さん（中 1 と高 1 の二人）も参加。

・環境教育は、おもしろくないと続かない、参加してくれた人の興味にプラスαで自然のこと、日常生活と自然環境を結びつける何かを持ち帰ってもらうことを心掛けている（自然環境アカデミー・メンバー）

・川の市民館が環境教育の場として、これからも活用されていくポテンシャルを持っている（自然環境アカデミー・メンバー）。

(3) 地域の自然環境

（今回観察した植物・生き物は以下の通り）

・シジュウカラ、ウグイス、カワラヒワ（声）、ムクドリ、ヒヨドリ、ダイサギ、アオサギ、カワウ、カルガモ、セグロセキレイ

・ニセアカシア、カラスノエンドウ、ナガミヒナゲシ、シロツメクサ、アカツメクサ、ハルジオン、ヒメジオン、ヘビイチゴ、ヘラオオバコ、ヨモギ、タンポポの綿毛

・アカデミーの若手スタッフの方によると、高架下の河川敷エリアは 5・6 年前の台風の際には冠水したところ。この時の台風の影響で、多摩川の流路も少し変わり、風景や植物などの生態が少し変化した、と説明してくれた。またここには以前ホームレスの人が住んでいたが、同じく 5・6 年前の台風で亡くなったそう。

・このあたりは、ホトトギス、ジョウビタキが見られるようだ。



(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

・自然環境アカデミーのスタッフの方々が、福生水辺のイベントを運営。現在、7、8人が自然観察、工作づくり、環境教育を教えるメンバーがいる。また河川敷の侵略的外来生物ハリエンシダの除去、八王子の里山保全活動、農作業体験（ふっさ ECO カフェ）といった、多摩川の水辺を支えるための、周辺の山地や草地における自然環境活動を行っている。

・自然観察では、鳥や植物だけの特定分野の知識だけでなく、天気・地形・魚・昆虫など、トータルな知識を有したガイドの存在が重要。自然環境アカデミーの現代表はこの点ではとても貴重な人材（このような人材育成までに 20 年以上の時を要した）であり、トータルな知識を有した教育者を育てるシステムが必要である（自然環境アカデミー）

・現在、福生水辺の楽校には、高齢の参加者がほとんどいないため、今後高齢者が参加できる仕組みづくりを行っていき、とのこと（自然環境アカデミー・メンバー）。メンバーのひとは、NPO の取組みとは別に市内の公園ボランティアを行いながら、地域の高齢者の学習・社会参加の機会の創出、地域文化の継承を考えて取組んでいる。

・個人的なつながりとして、狛江水辺・とどろき水辺・あきしま水辺の楽校のメンバーと知り合い。

・多摩川では多くの水辺の楽校が開設されているにも関わらず、あまり横のつながりが感じられない。プログラムのマンネリ化を防ぐために交流する機会をつくる必要がある（自然環境アカデミー・メンバー）

・福生水辺に関する調査研究は、明治大学の宮岡一雄教授（故）や、倉本宣教授（明治大学農学部農学科応用植物生態学研究室）が詳しい。また学芸大学や大妻女子大学ともつながりがある。

・現在、16 校の小中学校とつながっており、活動の告知ができる体制が整っている。小学校とのつながっているのは、新任の先生を対象とした環境教育等に係る研修を自然環境アカデミーで受けることがきっかけとなっている。研修を受けた先生がその後、コンタクトをとってくることによりつながりが生まれている。

・企業からの CSR も受けており、の職員に対して CSR を実施。CSR 推進室を有する企業は、業務の体制が整っている。CSR は自然環境アカデミーの重要な収入源となっている。参加企業は都内の企業が大半で、近くて八王子。福生在住の職員はほとんどいない。

(4) あきしま水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.5】

表 2-5: あきしま水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	あきしま水辺の楽校
活動内容・イベント	春の野草観察会
調査日時	2019年5月24日(金) 8:15-14:00
天候	晴れ渡る青空
主なヒアリング対象者	あきしま水辺の楽校運営協議会会長
活動参加者	吉田、増田
活動場所および 関連主体の位置	 <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none">  昭島市立成隣小学校  昭島市立田中小学校  昭島市役所  昭島ロータリークラブ
(1) 当日の活動状況	
<p>・今回は、あきしま水辺の楽校「春の野草観察会」の活動に参加。野草観察会は近隣の小学校2校(成隣小、田中小)の4年生の総合学習の時間を活用して実施。私たちが参加した日には、午前中に成隣小の2クラス(各回30名程度)の生徒を対象に行われた。前日は田中小を対象に実施。今回参加した水辺の楽校のメンバーは12名。殆どが定年後のセカンドキャリアの方々、Facebookで情報発信を担当者1名、女性は1名。</p> <p>・向暑の候、枝振りのよいオニグルミの木陰に張られたテント、高く伸びた草むらの中から縄張りを主張するキジの声が時折聞こえてくる小さな空き地が今回の活動拠点。</p> <p>・野草観察会では、5つのグループを分かれ、あらかじめ番号がつけられた野草(約20種)の解説ポイントを40分程度かけて巡った。各グループには案内役1名、サポート役1名の2名体制で水辺の楽校のメンバーが同行してルートを巡った。</p> <p>・小学校の総合学習ということもあり、子どもたちには事前に写真付きの野草リストが配布され、案内役は各野草の説明をしっかりと頭に入れて解説しており、事前の準備が入念になされた活動であった。</p>	
	
(2) 地域の子どもの様子	
<p>・桑の実子どもたちにも大人気!はじめ、見た目のいびつさに「気持ちわる〜い。こんなの食べれるの?」とぼやいていた子供も大人たちが食べる姿をみせると、恐る恐る桑の実を口に運び、その甘さに魅了され、突然元気を取り戻していた。中には幾つもの実をほおぼり、舌を真っ赤に染め、嬉々とした表情を浮かべる子もいた。</p> <p>・茎の薄皮を剥き、芯を舐めると目の醒める酸っぱさを味わえるイタドリも人気の野草。食べることができる野草が</p>	

河原に生えていることに多くの子供たちが驚いていた。一方で、ケキツネノボタンやクサノオウなど毒のある野草についても、間違っって食べないように子供たちに教えていた。最後にはカラスノエンドウで笛吹き遊び。子供たちはカラスノエンドウの房を咥え、夢中で音を鳴らしていた。

・今回参加した子供たちの8割は近くの小学校に通っているが、水辺の楽校の拠点近くで河原遊びをしたことがないとの事。



(3) 地域の自然環境

・イネ科の野草：カラスムギ、イヌムギ、スズメノチャヒキなど 11 種があきしまの河原にはある。

(今回観察した植物・生き物は以下の通り)

・アカツメクサ、シロツメクサ、オニグルミ、クサノオウ、キショウブ、ケキツネノボタン、ナガバギシギシ、ノイバラ、ヘラオオバコ、ハリエンジュ (ニセアカシア)、イボタノキ、エノキ、クズ、ヤマブキ等。

シジュウカラ、キジ (声)、ウグイス (声)、ガビチョウ、ヨシキリ、エナガ、オナガ、アオサギ、ミシシippアカミミガメ、アジアイトトンボ、ナナホシテントウ、クロアゲハ、モンシロチョウ、アユ (稚魚)、タヌキ等。

・国交省により以前整備していた木道やワンドを整備したが、大雨で壊れて以降、改修がなされていない。

・昔は、ガサガサや魚釣りの活動もしていたが、大雨等で河川環境が変化したことで、浅瀬部分が減り、最近ではイカダ体験や野草活動を行っている。



(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

・あきしま水辺の楽校のメンバーは、登録者は 30 名程度で、そのうち活動には毎回 10~15 名が参加している。中心となっているメンバーは、昔からの顔なじみで、フラットな関係を築いており、子ども心を忘れていない地元の幼馴染たちが大人になったようなグループといった印象を受けた。

・メンバーの多くは昭島の場所の知識をとても豊富に有しており、空いた時間には、100 万年前にいたアキシマクジラ、河川敷で発見された貝塚、鉄道が走り始めた頃に起こった大雨の日の大事故、豊富で質の高い地下水、良質な多摩川の砂利の話をしてくれた。

・国交省や昭島市との関係は、最近では薄くなっている。国交省は水辺の楽校事業が始まりだした当初はサポートに積極的であったが、人事異動で担当者が変わるなどにより、当初に比べると連携することが少なくなった。現在は、小学校からの謝金収入等をベースに、ボランタリーに活動を継続している。

・他の水辺の楽校との連携は、現在はほとんどない。メンバー曰く、あきしまは水辺の楽校の異端児。

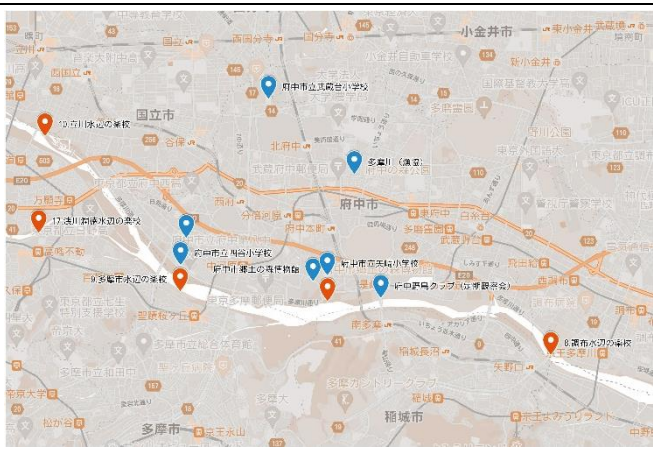
(5) 多摩市水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.10】

表 2-6: 多摩市水辺の楽校・活動の現状

調査団体	多摩市水辺の楽校
活動内容・イベント	— (ヒアリングのみ)
調査日時	2019年7月9日(火) 18:30-19:30
天候	—
主なヒアリング対象者	多摩市水辺の楽校運営協議会・会員 6-7名 多摩市役所環境部環境政策課・担当者 2名
活動参加者	吉田、増田
活動場所および 関連主体の位置	— (調査研究の趣旨説明や意見交換に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)
(1) 当日の活動状況 (ヒアリング調査の概況)	
<p>・「多摩市水辺の楽校運営協議会」の月一定例会に参加し、当団体の紹介機会を頂いた。助成研究の内容や私たちの団体の活動を説明し、その後質疑応答の時間を設けていただき、運営協議会のメンバーと意見交換を実施。研究活動を通じて、多摩川流域での自然や社会のつながりをつくっていききたい、との本調査趣旨に対して、既存の組織(流域懇談会)やそれらの取り組みとの違いについて意見交換を行った。</p> <p>・【2019年の活動予定】</p> <p>7月15日(月) 午前「大栗川水辺まつり」</p> <p>7月26日(金) 終日「多摩川源流体験サマーキャンプ」</p> <p>8月25日(日) 午前「乞田川の恵み」@乞田・貝取ふれあい広場公園 など</p>	
(2) 地域の子どもの様子	
— (調査研究の趣旨説明や意見交換に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)	
(3) 地域の自然環境	
— (調査研究の趣旨説明や意見交換に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)	
(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携	
— (調査研究の趣旨説明や意見交換に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)	

(6) 府中水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.11】

表 2-7: 府中水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	府中水辺の楽校
活動内容・イベント	— (ヒアリングのみ)
調査日時	2019年5月15日(水) 13:30-14:30
天候	—
主なヒアリング対象者	府中市生活環境部環境政策課自然保護係・担当者2名 府中水辺の楽校運営協議会会長
活動参加者	吉田、増田
活動場所および 関連主体の位置	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 府中市郷土の森博物館 ● 多摩川(漁協) ● 府中野鳥クラブ(定期観察会) ● 特定非営利活動法人 野外遊び喜び総合研究所(あばれんぼキャンプ事務局) ● 府中市立矢崎小学校 ● 府中市立四谷小学校 ● 府中市立武蔵台小学校 </div> <div style="flex: 2;">  </div> </div>
(1) 当日の活動状況(ヒアリング調査の概況)	
<p>・府中水辺の楽校の事務局を担当している府中市生活環境部環境政策課担当者2名と、水辺の楽校運営協議会会長に対してヒアリング調査を実施。はじめに当の紹介、東急財団の研究助成の概要を伝え、その後府中水辺の楽校の活動に関する以下の内容について説明をいただいた。</p> <p>・【2019年の活動予定】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 6/22(土)「多摩川でガサガサ魚とりと投網」 2. 7/21(日)「多摩川サマースクール 2019」 3. 8/1(木)「多摩川源流体験教室」 4. 8/24(土)「多摩川おさかなウォッチング」 5. 9/7(土)「多摩川でガサガサ魚とりと魚つかみ」 6. 10/5(土)「多摩川河口観察会 2019」 7. 2/8(土)「多摩川野鳥観察会」 8. 2月中「府中水辺の楽校 活動展示会」 <p>通年：小学校の総合的な学習の時間支援(矢崎小学校)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の募集は、市の広報誌とHPで告知している。 ・現在は活動メニューのパッケージができており、ここ数年活動内容の大きな変更はない。ただし、2019年度は野鳥観察会が活動に追加された。 ・活動メニューを作成した方は、府中水辺の楽校の設立時にいた市民とのこと(現在は市外へ) 	
(2) 地域の子どもの様子	
<ul style="list-style-type: none"> ・小学3年生～6年生が「子ども実行委員」として運営のお手伝いをしている。 ・また、これまでに府中水辺の楽校に参加したことがある中学生、高校生、大学生が時々活動のサポートをしている。経験豊かな子はマスをさばける程のスキルを有している。 ・府中が位置する多摩川の中流だけでなく、上流や下流でも活動を行うことで、子どもたちには、上流の水の冷たさや多摩川に生息する魚や昆虫、植物の多様さを学んでほしいと考えている(水辺の楽校・会長)。 ・特に源流体験の日には小河内ダムの見学に行く。水源林をみることは、多摩川の豊かさを伝えることにつながって 	

<p>いると考える（水辺の楽校・会長）。</p>
<p>(3) 地域の自然環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・府中市民は緑が豊かなことを誇りに思っている。 ・府中市内には浅間山という丘のような山があり、市内の重要な自然環境の一つ ・また絶滅危惧種の「ムサシノキスゲ」がみられる等、貴重な自然も残っている。 ・一方市内では、つばめの数が減っている。
<p>(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・府中水辺の楽校の協力団体には、府中市郷土の森博物館、府中多摩川漁業協同組合、府中野鳥クラブ、とどろき水辺の楽校、だいし水辺の楽校、NPO 法人野外遊び喜び総合研究所（あばれんぼキャンプ）がある。 ・市内の小学校とは、多摩川の近くに位置する矢崎小学校、四谷小学校、武蔵台小学校とつながっており、総合学習の支援活動を府中水辺の楽校が実施している。 ・小学校とのつながりは、担任の先生や校長・副校長の意向によるところが大きい。水辺の楽校の活動を高く評価している学校とのつながりが強い。 ・22名の府中市民が協力者にいる。 <p>※あばれんぼキャンプ HP : http://www.abarenbo-camp.com/</p>



・調布水辺の楽校は、今回のガサガサも含めて年4回の活動を実施予定。

5月18日(土) ガサガサ

7月27日(土) ガサガサ+アルファ

11月2日(土) 河原の植物観察&クリーンアップ

1月18日(土) 多摩川のバードウォッチング

(2) 地域の子どもの様子

- ・子どもだけの参加もみられたが、多くは親子で参加。
- ・学年別で見ると、低学年が多く(事後の報告資料によると、低学年70名、中学年48名、高学年13名)という結果だった。低学年は必ず保護者同伴という約束だったが、集計すると、保護者が同伴していなかったかも知れない児童が見られた。今回、受付時に名簿が間に合わなかったことがあるので、若干数に違いがあると思われる。
- ・親子合わせて268名という人数が一举に入ったため、なかなか魚をすくうことができない子どももいたが、コツをつかんだ子どもは、オイカワやウグイ、ヒガシマドジョウなどを捕まえて自慢げな様子だった。



(3) 地域の自然環境

(今回観察した生き物は以下の通り)

在来種: アユ(稚魚)、オイカワ、メダカ、スミウキゴリ、コオニヤンマのヤゴ、シマドジョウ、マルタウグイ(稚魚)、ヨシノボリ、外来種: コクチバス、グッピー、ウシガエルのオタマジャクシ(特定外来)、カワリヌマエビ、モノアラガイ、オカモノアラガイ、アメリカザリガニなど。別紙資料によると、当日は16種の水生生物を確認。



(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

- ・調布水辺の楽校は、近隣地域の小学校との関わりが強い。現在校長は元布田小学校の校長であり、H21(2009)に赴任し、同年、調布水辺の楽校を開設(登録)。小学校の校長時代には、布田小学校の先生を30名程呼んで運営していた。
- ・調布水辺の楽校へ参加する小学校は、調和小、布田小、国領小、柏野小、飛田給小、杉森小、多摩川小、北ノ台小、染地小、緑ヶ丘小、若葉小、石原小、上ノ原小、深大寺小、滝坂小、富士見台小、八雲台小、第1小、第2小、第3小の20校。
- ・以前は、富士見台小の先生も来てもらっていたが、現在は布田小の先生がメイン。小学校の先生に来てもらうと、普段から子どもたちの面倒をみているため、安全管理の面で安心できる、とのこと。
- ・また以下の主体も調布水辺の楽校の運営に関わる
布田小おやじネット(当日は3名参加)、布田小学校: 校長・副校長ほか教員(当日は5名参加)、調布市多摩川自然情報館(生き物講師として当日参加)、調布市環境部・政策課など

(8) かわさき水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.14】

表 2-9:かわさき水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	かわさき水辺の楽校
活動内容・イベント	多摩川へのアユの稚魚放流
調査日時	2019年4月20日(土) 10:30-12:30
天候	晴れ、春の陽気
主なヒアリング対象者	かわさき水辺の楽校校長、活動メンバー
活動参加者	吉田、増田
活動場所および 関連主体の位置	 <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 平瀬川流域まちづくり協議会 ● とんもり谷戸の会 ● 吾生緑地西地区 水沢の森 ● 社会福祉法人はぐるまの会 「はぐるま柳原農園」
(1) 当日の活動状況 (ヒアリング調査の概況)	
<ul style="list-style-type: none"> ・多摩川へのアユの稚魚の放流活動に参加。 ・アユの稚魚の養殖をしている川崎河川漁業組合と協働で実施された。漁協とのつながりは13年目となる。 ・今回の放流では、子ども30名、大人45名が参加し、4千匹の稚魚を多摩川に放流した。(多摩川全体では2万4千匹を放流)かわさき水辺の楽校のスタッフは約15名、スタッフは高齢の方が多かったが、20歳の若者のスタッフの姿もあった。小学生の時から水辺の楽校に参加して、運営のお手伝いをしている様子。 ・アユが勢いよく飛び跳ねる姿に子どもたちは爛々とした眼差しを向け、一心不乱にバケツに稚魚を掬い、多摩川へと送りだしていた。大人たちも子どもたちの面倒をみつつ、あまり目にする事のない大量の稚魚に興奮気味。スタッフの方々も満足げな表情を浮かべていた。 	
	
(2) 地域の子どもの様子	
<ul style="list-style-type: none"> ・川をはじめとした自然での遊びに関する市民のモチベーションをあげていきたい(多摩エコメンバー)。 ・子どもたちが学校では経験できない冒険遊びの場のきっかけを提供すること、生物多様性の重要性を伝えることにモチベーションを感じている(多摩エコメンバー) ・子どものふるさと創りを念頭に活動を行う。近年のSDGsもテーマとして活動を継続させていきたい(多摩エコメンバー) 	

(3) 地域の自然環境

- ・アユは10月から12月にかけて海にくだり、4月末に海から川に上がってくる。寿命はわずか一年。多摩川ではポピュラーな魚。石についた藻類を食べるという習性がある。成魚の全長は30 cmに達する個体もいるが、10 cmほどで成熟するものもいる。
- ・多摩川では夏にはスズキやボラが跳ねる。
- ・小太りなカワセミ、セグロカモメ、カワウ、アオサギ、コサギ、バンを確認。
- ・多摩川に流れる二カ領用水は、護岸がきれいに整備され、心地よい散歩道となっている。



(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

- ・NPO 法人多摩川エコミュージアムは二ヶ領せせらぎ館の管理を行っており、同メンバーもかわさき水辺の楽校の活動に加わりながら活動を行っている。
- ・都市大の二子玉川エリアマネジメントとのつながりがある（水一斉調査を実施）
- ・水辺の学校以外では、障がい者の農業参加の場となる都市農園「はぐるま農園」にも携わっている（多摩川で駅伝大会。ダウン症の人参加。）—平瀬川流域まちづくり協議会の活動
- ・これまでにセブンイレブン財団、イオン財団等の助成を受けて活動。水辺で活動するためのライフジャケットやラフティングボート等の備品を充実させながら、地域に開くことで活動を展開させてきた。
- ・多摩川流域全体でつながりをつくり活動の幅を広げていきたいが、まだできておらず課題として認識しているものの、今は川崎市内の関連団体と連携して協力を広げていきたい。

(9) 狛江水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.15】

表 2-10: 狛江水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	狛江水辺の楽校
活動内容・イベント	狛江水辺の楽校の活動展示(狛江市全体の河川敷一斉清掃)
調査日時	2019年4月13日(土) 10-12時
天候	晴れ・あたたかい
主なヒアリング対象者	狛江水辺の楽校代表およびメンバー
活動参加者	吉田
活動場所および 関連主体の位置	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1;"> <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 狛江市 ● 国土交通省 関東地方整備局 京浜河川事務所 ● 狛江市立狛江第一小学校 ● 狛江市立狛江第三小学校 ● 狛江市立狛江第五小学校 ● 狛江市立狛江第六小学校 ● 狛江市立和泉小学校 ● 狛江市立緑野小学校 </div> <div style="flex: 2;">  </div> </div>
(1) 当日の活動状況(ヒアリング調査の概況)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 狛江市全体での河川敷一斉清掃に参加。この一斉清掃では、小・中学校、自治会、商店街、野球チーム、狛江市、などから数百人規模の参加者で、子どもからお年寄りまで参加してのゴミ拾い。 ・ 市から配られているリサイクルビニール袋を提げてゴミ拾いスタート。ゴミ拾いは下流から始まり、上流の線路高架前の広場が終着点。そこで集めたゴミを分別して回収。 ・ 「狛江市に住んでいる家庭は誰かしら必ず参加しているよ」という狛江水辺の楽校メンバーのひとりが言う通り、多くの人で賑わい、ゴミ拾いをする人の流れがあちこちに見られた。 	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 狛江市の職員が分別を案内して、終わった人はそれぞれのグループで集まって記念撮影をしたり、遊んだりして過ごす。この賑わいのなかで、市長などのあいさつが広場の一角で行われる。 ・ 広場には、川辺の自然環境やそれを保全する取り組みを紹介するパネルが展示してある。近年見られるアライグマやハクビシンなどの出没マップやこれらの標本(1体40万程のはく製。借り物)展示があり、同じ場所に狛江水辺の楽校の取り組みを紹介するブースも。 ・ 狛江水辺の楽校のブースでは、多摩川の生き物である、マルタウグイの稚魚やカニ、ザリガニ、ミシシippiaカハラカメを捕まえた水槽があり、子どもたちはそれに触ったり、逃げたカニを捕まえたりして楽しんでいる。 ・ 狛江水辺のメンバーは、水辺で採ってきたスカンボ(イタドリ)を剥いて塩をかけて子どもたちに食べさせている。食べると酸っぱいがみずみずしいフルーツみたいなイタドリを、子どもたちはおそろおそろ食べていた。イタドリは肩こりに塗ると傷みがとれることから、イタドリと名付けられたそう。メンバーらが子どもの頃には、おやつのだ 	

<p>わりだった、とのこと。今の時期しか食べられない野草の味と共に、植物の名前の由来などを学ぶことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴミ拾いを終えた人で河川敷はとても賑わっており、釣りを楽しむ人やピクニックをする親子連れ、ヨガやラグビー、ランニング、犬の散歩、音楽を聴きながら寝転ぶ人と様々。釣りの人に声をかけると、スモールマウスバスを釣っているんだ、前はラージマウスバスが多かったけど、最近ではスモールマウスの方が優勢で、ここで釣れるんだ、とのこと。
<p>(2) 地域の子どもの様子</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・親子連れの参加者が多く、また小中学校の生徒も多数参加しているため、あちこちで、「テントウムシいたー!」「へびだあー!」「トリ（ダイサギ）かわいい〜」と声が聞こえてくる。ホウキの形をした水辺の草を振り回しながら子どもたちはあちこち歩き回り、親たちはおしゃべりを楽しみながら歩く。 ・小さい子どもをつれた人は、あまり川に近づかないように声をかけながら、子どもたちを見守る。天候にも恵まれた粕江のゴミ拾いは、子どもにとっては絶好のお散歩・生き物探しの場になっていると感じた。
<p>(3) 地域の自然環境</p>
<p>— (当日の活動への参与観察に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)</p>
<p>(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携</p>
<p>— (当日の活動への参与観察に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)</p>

(10) せたがや水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.17】

表 2-11: せたがや水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	せたがや水辺の楽校
活動内容・イベント	せたがやの水辺の楽校」の開校式
調査日時	2019年4月21日(日) 11:00-14:30
天候	薄い雲が空を覆っているが、暖かく活動日和
主なヒアリング対象者	NPO 法人せたがや水辺デザインネットワーク・コミュニティデザイン事業部、事務局
活動参加者	吉田、増田
活動場所および 関連主体の位置	 <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> 一般社団法人二子玉川エリアマネジメンツ 二子玉川学会(東京都立大学二子玉川キャンパス) せたよんフィールドミュージアム(瀬田四丁目目小坂緑地)
(1) 当日の活動状況(ヒアリング調査の概況)	
<ul style="list-style-type: none"> 「せたがやの水辺の楽校」の開校式へ参加。午前中は世田谷の高校生による音楽会、午後の部は子供へのネイチャーゲームとマルタウグイの生息環境整備。開校式への参加者は60~80名程度 音楽会では、世界の終わりのRPG、星野源の恋、となりのトトロ、ミッキーマウスマーチ、アンコールで学園天国が演奏された。河川敷での演奏はとても気持ちがよさそうであった。 ネイチャーゲームは、主に5歳から10歳程度を対象とした宝探しゲームの变化形、商品は野鳥シール。 	
	
<ul style="list-style-type: none"> マルタウグイの産卵床づくり: マルタウグイは、沿岸部から河川河口部の汽水域に生息し、春の産卵期には川を遡上する遡河回遊所であり、多摩川にも生息する。幼魚は1年ほど河口付近で過ごし、7~9cmほどに成長して海に降る。寿命は10年ほどと長寿命。腹部に赤いラインがあるのが特徴。釣り人には人気の魚。 マルタウグイの産卵環境は、苔の生えていないつるつとした石の上であるため、せたがや水辺の楽校スタッフは、石を磨く活動もしている この季節、多摩川では川沿いに敷き詰められた小型のテトラポットの周辺でマルタウグイが孵化し、2cm程度の稚魚が大量に生息している。しかし、水草が乏しいテトラポット周辺の環境では、マルタウグイの稚魚はその他の中型から大型の魚から捕食される危険性がある。 そこで「せたがや水辺の楽校」の活動では、近くの雑木林からとってきたアズマネザサを70~80cmの長さに切り、それを束ね、中に重しとなる石を埋め込んだものをテトラポットの間に沈め、マルタウグイの生息環境を保全する活動を実施。 	

・「せたがや水辺の楽校」と手書きで描かれたのぼり旗を掲げた人が先導し、60人近くの人々がアズマネザサを抱え、河川敷を練り歩く風景は壮快であった。



(2) 地域の子どもの様子

ー (当日の活動への参与観察に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)

(3) 地域の自然環境

ー (当日の活動への参与観察に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)

(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

・ NPO 法人せたがや水辺デザインネットワークが世田谷水辺の楽校の運営主体。同 NPO では、瀬田四丁目旧小坂緑地でのイベントの開催も行っている。

・ 協力する活動団体として、二子玉川カヌー部、一般社団法人二子玉川エリアマネジメント、今年度より発足予定の二子玉川学会などがあり、開校式当日はこれらの団体の方の参加がみられた。

(当日の活動への参与観察に留まり、ヒアリング等が十分ではなかった)

(11) とどろき水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.18】

表 2-12:とどろき水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	とどろき水辺の楽校
活動内容・イベント	2019年開校式(植物観察会、ガサガサ魚捕り体験、野草うどん)
調査日時	2019年4月29日(月・祝)9:00-14:00
天候	くもり時々晴れ
主なヒアリング対象者	とどろき水辺の楽校代表、活動メンバー
活動参加者	吉田、増田、渡邊
活動場所および 関連主体の位置	 <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 川崎市立中原小学校 ● 川崎市立小杉小学校 ● 川崎市立上丸子小学校 ● 川崎市立大戸小学校 ● 川崎市立新城小学校 ● 川崎市立宮内小学校 ● 川崎市立大谷戸小学校 ● 川崎市建設緑政局
(1) 当日の活動状況(ヒアリング調査の概況)	
<ul style="list-style-type: none"> ・「とどろき水辺の楽校」の2019年最初のイベントである開校式(植物観察会、ガサガサ魚捕り体験、野草うどん)に参加。本日の参加者は約300名。 ・主催者からの挨拶、活動を支援している国交省京浜河川事務所所長、川崎市緑政局緑政部部長からの挨拶、イベントのお手伝いをしている向河原子育成会、ガサガサ魚捕り、植物観察の講師紹介がなされた。川崎市緑政局は多摩川プランで3校(かわさき・とどろき・だいし)を支援。また下沼子供おやじ会、多摩川塾も参加。 ・当日はiTSCOM、東京新聞からの取材があり、活動は川崎市のHPに掲載される。 ・開会式の最後はラジオ体操をおこなった。 <p>とどろき活動報告：http://www.todoroki.org/2019_report/2019_0429_01_report.php</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
(2) 地域の子どもの様子	
<ul style="list-style-type: none"> ・今の水辺の楽校スタッフは、子供が水辺の活動に参加したのをきっかけにして、運営にも関わることとなった。 ・植物の観察会は、小学生を対象に低学年と高学年に分かれて実施。高学年のグループに参加していた数名の子供は、本活動の常連のようで大人より植物について詳しい子もちらほら。その姿をみて感心する大人たちの様子があった。 ・ガサガサ魚捕りでは、網を片手にライフジャケットを着用し、多摩川へ。ガサガサでは、膝まで浸かる浅瀬で子供たちは大興奮で川の中に入り、生き物探しに邁進。大人も子供も泥にまみれて、川を全力で楽しんでいた。 	

・講師（えのきんさん）は、生き物に詳しいのはもちろんのこと、子供が楽しめる遊びの工夫（子供を一行に並ばせ、それを数列つくり、大人が生き物をガサガサしながら迫るなど）がなされていた。



(3) 地域の自然環境

・今回観察した植物：ニホンタンポポ、セイヨウタンポポ、アカツメクサ、ムラサキツユクサ、モモイロシロツメクサ、コメツブツメクサ、カラスノエンドウ、ハマダイコン、ヘラオオバコ、ハルジオン、ヒメジオン、ナズナなど

・魚類9種：アユ、マルタ（稚魚）、オイカワ、カワムツ、スミウキゴリ、ヌマチチブ、ドジョウ、ヒガシシマドジョウ、ボラ（稚魚）、甲殻類4種：モクズガニ、スジエビ、ヌマエビ、アメリカザリガニ、トンボ（ヤゴ）6種：コヤマトンボ、コオニヤンマ、ダビドサナエ、オナガサナエ、ミヤマサナエ、ハグロトンボ

・野草の天ぷらうどん：ガサガサ後には、多摩川で採れた野草の天ぷらうどん、デザートにはハマダイコンの花びらがのったゼリーがふるまわれた。

・野草の種類：いたどりの葉、セイタカアワダチソウ、クズの新芽、くわの葉、よもぎの葉、タンポポ



(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

- ・NPO 法人となって以降、行政とのつながりが活発になり、委託事業を受けることとなった。
- ・とどろき水辺の楽校は今年で18年目。デザインやHPができる方など、それぞれの特技を生かして活動を行う。
- ・府中とうのきの水辺の楽校とは合同イベントを実施。また多摩川源流大学とつながりがあり、合同での活動を実施。
- ・周辺の小学校7校とつながりあり。

(12) うのき水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.19】

表 2-13:うのき水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	うのき水辺の楽校	
活動内容・イベント	春のバードウォッチング	
調査日時	2019年4月27日(土) 8:45-11:30	
天候	くもり、肌寒い天気(午後から雨)	
主なヒアリング対象者	うのき水辺の楽校・校長、活動メンバー	
活動参加者	吉田、増田、パク	
活動場所および 関連主体の位置	<p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大田区立額甲小学校 ● 鶴の木二丁目町会(会館) ● 鶴の木二丁目町会(会館) ● 青少年対策鶴の木地区委員会(鶴の木特別出張所) ● 鶴の木西町会(松山公園) ● 鶴の木東町会(大田区立東調布第三小学校) ● 南久が原一丁目町会(大田区立大森第七中学校) ● 千鳥南町会(大田区立千鳥小学校) ● 千鳥北町会(千鳥いこい公園) 	
(1) 当日の活動状況(ヒアリング調査の概況)		
<ul style="list-style-type: none"> ・「多摩川台公園での春のバードウォッチングに参加。参加者は35名、(小学生15名、中学生4名、地域住民5名、保護者11名程) ・協力団体は、嶺町小学校をはじめ、鶴の木地区連合町会、青少年対策鶴の木地区委員会。また本日の講師は日本野鳥の会のメンバーの方。 ・特に、多摩川に近い嶺町小学校は、うのき水辺の楽校・ボランティア・スタッフの拠点となっている。また同小学校は、総合学習の中に多摩川の学習を組み込んでおり(多摩川クラブ)、今日のバードウォッチングへの参加者が多かった。 ・イベント後には嶺町小学校で子どもたちも交えてボランティアミーティングを実施。参加者17名。今日のバードウォッチングの感想や運営上の課題について話し合った。 		
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>		
(2) 地域の子どもの様子		
<ul style="list-style-type: none"> ・うのきの水辺では、最後のボランティアミーティングに子どもたちを交えて行うなど、子どもリーダーの育成に力を入れている(子ども育成プロジェクトを計画)ところに特徴があると感じた。 ・子どもたちや参加者から、以下のようなバードウォッチングの活動を振り返っての感想や意見が挙がった。 この時期らしい鳥や植物がみられて良かった／から大人まで同じ視点で鳥を眺めながら交流することができて良か 		

った／双眼鏡を振り回してぶつけないように気をつけないといけない（小3から参加。現在中学3年）

・今回は比較的参加者の人数が少なかったが、おかげでまとまって動くことができ良かった。いつもは多すぎて間延びしてしまう（保護者。5・6年お手伝い）／受付を担当。双眼鏡の管理の仕方を工夫した方が良い（保護者）／地域の掲示板を見て参加。カヌー等が好き（地域の人。ボラ歴3年）／町会長さんなど新しい方の参加があって良かった。また嶺町小の生徒は原体験から環境問題を考えることができている。この季節らしい鳥も見ることができて、多摩川の自然の恵みを実感。この地域の強み、存在感が出たように思った（野鳥の会・講師）。



(3) 地域の自然環境

・今回の講師である日本野鳥の会の方からは、以下のような感想・意見が挙げられた。

普段は3分で通り過ぎる多摩川台公園。今日はいろんな生き物のおかげで40分くらい時間をかけて過ごすことができた。草地の価値を再評価する必要がある。近年森や林は、その価値が見直されているが、草地についてはその価値はととも低く、草地性の生き物の住処がなくなりつつある。

（今回の調査で観察した生き物は以下の通り。）

野鳥：コサメビタキ、キビタキ（声）、ワカケホンセイインコ、カワセミ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、オオバン、コガモ、アイガモ、カワウ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、センダイムシクイ、オオヨシキリ（声）、キジバト、スズメ、ツバメなど。植物：ツチグリ、ハナミズキ、カランスノエンドウ、キンラン、ギンラン、ハマダイコン、ツツジ、タンポポ、サツキなど。

(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

- ・とどろき、だいし水辺の楽校－創設時に支援してもらった
- ・多摩川水辺の楽校シンポジウム川崎（主催：川崎市・川崎市域水辺の楽校推進協議会）－とどろき、だいし、かわさき、うのきの水辺の楽校、ほか地域の市民グループそれぞれが、各自の活動を発表。ワークショップ、展示など。
- ・嶺町小学校、その他近隣の小学校、鶴の木地区町会、大学（国士舘、日大等のスポーツ系）は、大勢が参加するガサガサの安全サポート。
- ・嶺町小学校の校長、町会長は、学校・町会の体制が新しくなった（新校長・町会長とも今日のイベントに参加）
- ・子供サポーター育成プロジェクト：今年から創設予定。構想は以前からあり、子供サポーターの仕組みを導入していたが、今年度から、他の水辺の楽校を訪問させて、サポーターの育成を図る予定とのこと。

(13) だいし水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.21】

表 2-14:だいし水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	だいし水辺の楽校
活動内容・イベント	市民参加型の環境調査「スコープ 100」※通常の水辺の楽校プログラムではなく、海辺つくり研究会や千葉工業大学等との協働で実施する市民参加型の環境調査
調査日時	2019年5月19日(日) 10:00-15:30
天候	晴れ、日差しが強い
主なヒアリング対象者	NPO 法人多摩川干潟ネットワーク(大師河原水防センター)、NPO 法人海辺つくり研究会、ほか(千葉工業大学生命環境科学科社会圏環境研究室、横浜国立大学統合的的海洋教育・研究センター、東邦大学東京湾生態系研究センター)
活動参加者	吉田
活動場所および関連主体の位置	 <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 海辺つくり研究会 ● 千葉工業大学 ● 横浜国立大学

(1) 当日の活動状況(ヒアリング調査の概況)

- ・通常の水辺の楽校のプログラムではなく、海辺つくり研究会や千葉工業大学等との共同で実施する、市民参加型の環境調査「スコープ 100」の活動に参加。
- ・水防センターにて当日の役割分担等を確認するスタッフミーティングを行い、10時から12時まで午前の生き物調査、お昼をはさんで、13時半から15時半まで午後の観察・分析プログラムを行った。
- ・スタッフはおおよそ30名。この内の20名程が千葉工業大学・五明先生のゼミ生で、毎年1回、この調査を行っているとのこと。また講師の風呂田先生(東邦大名誉教授)をはじめ、多摩川干潟ネットワーク(だいし水辺の運営組織)、水防センターや自治体職員なども。
- ・一般の参加者はおおよそ30名。今回は、調査が主な目的ではあるが、小さな子どもを連れた親子の参加もあった。
- ・生き物調査では、6-8名でグループを組んで、全7グループによる干潟のスポット調査。各グループには、千葉工大の学生が2,3名おり、調査方法をレクチャーしてくれる。
- ・事前に干潟に立てられた各ポイントの旗を目印として、その付近の泥をスコップの長さを目印として、25センチ四方、深さ約20センチのところまで採取。採取した泥は玉ねぎ袋に全て入れ、近くの水たまりでシャバシャバして泥を洗い落とし、残ったものをジップロックの袋に入れる。これと合わせて、小さなペットボトル容器に干潟の水を入れて、土の塩分濃度を測る。



(14) 羽田水辺の楽校【水辺の活動一覧 No.22】

表 2-15: 羽田水辺の楽校・活動の現状(※表中の内容は調査時点において確認したもの)

調査団体	羽田水辺の楽校
活動内容・イベント	干潟の生き物観察会
調査日時	2019年5月5日(日) 10:00-12:00
天候	晴れ、あたたかい天気
主なヒアリング対象者	羽田水辺の楽校・とびはぜ倶楽部代表、活動メンバー
活動参加者	吉田
活動場所および 関連主体の位置	<div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="flex: 1;"> <p>(関連主体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大田区 ● 大田区立東糀谷小学校 ● 大田区立糀谷小学校 ● 大田区立羽田小学校 ● 大田区立中萩中小学校 ● 大田区立萩中小学校 ● 大田区立六郷小学校 ● 大田区立南六郷小学校 ● 大田区立多摩川小学校 ● 大田区立矢口西小学校 ● 大田区立赤松小学校 </div> <div style="flex: 2;">  </div> </div>
(1) 当日の活動状況 (ヒアリング調査の概況)	
<ul style="list-style-type: none"> ・干潟の生き物観察会に参加。参加者は子ども10名程、運営を含めて全体で30名程度。未就学児の参加も。 ・はじめに展望デッキから干潟を眺めてから、干潟に下りてシジミ、カニ、ハゼなど干潟の生き物を見つけて観察。生き物を捕まえた後は、活動メンバーから生き物解説とシジミの浄水作用実験。観察会終了後には、干潟への感謝をこめて、30分程度ゴミ拾いを行う。 ・シジミの浄水作用の実験は、シジミを入れた水槽と入れてないものとを比較する。この準備のため、干潟の生き物探しは、まずシジミの採取から行う。 	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
<ul style="list-style-type: none"> ・最後のゴミ拾いは、3-4m四方の区画内をシャベル、スコップを使って、干潟への感謝を込めながら行う。掘り起こすとヘドロのニオイと共に、ガラス片やビニール、プラゴミが次々と。土を掘り起こすことで、土を空気や太陽に触れさせる狙いも。この日は29.4キロのゴミを拾った。 	
	

(2) 地域の子どもたちの様子

- ・羽田の水辺では、干潟の生き物観察会がメイン。観察会の一部ともなっている干潟のゴミ拾いは、子どもたちや親たちの意識を高める上でも、干潟の環境にとっても、とても重要であると感じた。
- ・地域の小学校を対象とした野外学習の教材は、干潟や生き物の感触が生き生きと伝わるように工夫（校長）
- ・羽田の水辺の楽校の魅力は、何ととっても大師橋の干潟であり、水辺メンバーの中には、子どもの頃からこの干潟で遊んでいる人がいて、当時捕まえていたカニやハゼ、シジミといった干潟の生き物たちが、今でもこの干潟でみられることをとても飲んでいた。

(3) 地域の自然環境

- ・干潟=多摩川の底。ここには8種のカニがいる。今回の観察会では、ベンケイガニ、クロベンケイガニ、カクベンケイガニ、アシハラガニをみつける。
- ヤマトシジミ…水の浄化作用がすごい。このほかゴカイ、ソトオリガイも浄化作用がある。
- ・シジミが干潟で多く発見されるようになり、これが大田区で宣伝されると潮干狩りに来る人がたくさん来るようになり、現在は少し少なくなってきたとのこと。→当日も10人くらいの人がシジミ採り
- ・ハゼ…トビハゼは見つからず。
- ・西六郷高畑町会会長・ラブリバー 六郷川に花とシジミの会代表が、毎年、宍道湖からのシジミを多摩川に放流しているが、羽田の水辺の活動とは関係はない様子。

参考：

https://www.city.ota.tokyo.jp/kuho/kuho_web/20180321/tokusyu.html



(4) 活動主体の概況および、関連する地域の主体・他の水辺の楽校との連携

- ・地域パートナーシップ支援センター・創設者である方が、とびはぜ倶楽部・羽田水辺の楽校の活動の仕掛け人。
- ・15年前にゴミ拾いをするところから始めた。ゴミ拾いをしていた当初、企業から支援を受けていたことも（空きペットボトルを提供）。
- ・ゴミで足の踏み場もなかった場所が、今では学校の（野外活動の）教室になった」と会の代表は語る。
- ・羽田の水辺は、2013年に多摩川で20番目の水辺の楽校として登録。設立の際に、上流から下流までのシンポジウムを開催した。参考：http://www.todoroki.org/2014_report/2014_0222_01_report.php
- ・河川財団、トヨタ財団などの民間助成を受けながら活動を継続している。
- ・羽田の水辺は、任意団体である「多摩川とびはぜ倶楽部」が運営を担い、協力主体として「(一社) 地域パートナーシップ支援センター」（※とびはぜ倶楽部創設のきっかけとなる団体）、「NPO 法人大田・花とみどりのまちづくり」がある。（参考：花と緑のまちづくり http://blog.canpan.info/npoogc/category_33/1）
- ・羽田水辺の楽校（とびはぜ倶楽部）の会員は14名。この内およそ7名で実質は運営している。
- ・本羽田公園の近くに事務所は、土地は国交省で、建物は大田区。羽田の水辺に区が貸し出し。倉庫やミーティングスペースとしてつかう。
- ・地域の小学校の野外学習として干潟の生き物観察を行う。昨年は4校で実施。なお小学校では担任によって野外学習の内容が決まるため、毎年観察会を行う学校は異なるとのこと。
- ・これまでは小学校から依頼されて観察会を行ってきたが、今年からはチラシを作って、小学校に宣伝をする予定。
- ・地域との関係を聞くと、上記の小学校のほかは、会員の個人的なつながりから、地域の子どもや若者を水辺につれてきているとのこと。
- ・干潟の近くに住むホームレスの人が、地域の子どもの見守りを行う。水辺の人たちとの関係は良好とのこと。家出の子を保護、水辺に近づく子どもたちの見守りや注意をするなど。
- ・現在、沖縄の西表島・仲間川での水辺の楽校をつくらうとしており、来年この西表島と羽田水辺の楽校との交流事業を計画している。

2-3. 本章のまとめ

以下の文章中【 】内の数字は、水辺の活動一覧（表 1-1、表 2-2 から表 2-15）で示す各水辺の活動団体の数字と対応している。

(1) 各水辺の活動状況・活動の風景

生き物を観察する【2.3.4.5.13.19.21.22】、直接生き物や自然に触れる【2.5.13.14.18.21.22】、食を通じて季節を味わう【4.18】、生き物の生育環境や環境の手入れ【9.17.22】、工作体験【4】など、多摩川の自然環境に楽しく触れる活動内容が各水辺で実施されていた。特にガサガサや昆虫採集などは子どもたちに人気の活動であり、親子一緒に参加するため大勢の人が集まる活動風景をつくっている。

一方で、多くの人が集まる活動では、その準備や参加者の管理、子どもの安全確保など、マネジメントに多くのスタッフの協力が不可欠であり、それぞれの水辺の活動では、小学校や地元の自治会をはじめとする地域組織からの協力を得ながら活動を実施している（地域との連携は次項で詳述）。そのため継続的に活動を行うためには、運営スタッフの確保や地域の自然環境を伝えることのできる人材育成と共に、水辺の活動に協力する地域組織との継続的な関係づくりを行う必要がある。

地域との関係づくりに加えて、水辺での活動は多摩川の自然を舞台としているため、大雨や台風等の自然災害による地形や河床、流路などの変化、植生や生き物の生態の変化などを受けて、活動範囲の変更【21、22】や、活動内容・メニューの変更【5】を変えながら活動を行っていることが分かった。

(2) 地域の主体との連携

個々のイベントや活動運営を観察すると、NPO や市民団体が中心となり多様な活動内容を展開するところが多く【2.3.4.8.11.13.17.18.21.22】、また地元の小学校や児童施設との連携や協力が深いこと【2.3.4.5.11.13.14.18.19.21.22】を確認することができた。小学校との連携や協力は小学校の校長や担任の先生等の意向によるところが大きく、水辺の楽校の活動を高く評価している教員の存在が大きい。また自治体職員が積極的な事務局運営を図る【4.18】、ボランティアメンバーが主体的に運営を行う【5】、自治会や商店街、漁協等の地域組織との協力関係が深い【11.19.14.15】などの状況も把握された。一方で、地元組織との間で自然に対する見方の違いから齟齬がみられる場合【3】や、かつての国交省や自治体との関係や連携が薄れる【3.5】といった状況も確認できた。行政との関係については、人事異動により担当者の変更となる場合や、水辺のハード整備を中心に連携が図られていた場合などによって、つながりに変化がみられる。

またかつて水辺の活動に参加していた子どもたちがスタッフとして運営をお手伝い【11.14.19】するなど、地域の中で活動を支える循環を垣間見ることができた。

(3) 水辺の活動団体間の連携

水辺の活動団体間の連携としては、合同イベント・活動の実施や活動サポート等の連携がある【11.12.14.18.21.22】ことが分かった。一方で、個人的なつながりはあるものの、団体間としてはあまり感じられないほとんどない【4.5】等の意見や、活動創設時の連携や支え合い等、かつてはあったが現在では薄れている【3】といった状況も把握することができた。これは距離的に離れているために連携を継続すること、お互いの活動に参加しあうことに一定の難しさがあるものと思われる。

(4) 本章の調査まとめ

本研究では、現在まで多摩川の水辺で活動を行う 20 の活動団体を対象として参与観察を行い、各地域主体や団体間のつながりの形態を可視化することを、助成開始時には計画していたが、研究期間後半の調査活動がコロナの影響により十分な調査が行えず、当初の計画通りに可視化して示すことができなかった。したがって、継続的な調査とその成果の可視化に取り組んでいくことが今後の課題であるが、これについては、後述する多摩川オンラインシンポジウム等の実施について触れながら、本報告書のまとめの中で改めて記述する。

3. コロナによる水辺の活動の変化

今般の新型コロナウイルス感染症拡大を受けて各水辺の活動状況・内容は、現在大きく変化している。本章では、感染症の拡大の影響による各水辺の活動状況・内容の変化を捉えることで、当初計画していた交流会実施について再検討を行う。

3-1. アンケート・ヒアリング調査の概要

以下に示すように、各水辺の活動団体に対してコロナ禍における活動状況の変化を調査した。

表 3-1: コロナ禍における活動状況の変化に関する調査概要

調査期間	2021年2月～3月
調査方法	①電話や ZOOM による補足の聞き取り調査 ②アンケート調査 (Google Forms を利用し、多摩川オンラインシンポジウムへの参加予定団体への事前インタビューとして回答を収集)
調査項目	コロナ後の (1) 最近の活動の様子、(2) 子どもたちの様子・変化、 (3) 地域との関係の変化、(4) 未来の子どもたちへのメッセージ
回答団体数	10 団体 (うち①電話や ZOOM 等による補足の聞き取り調査は 9 団体、②アンケート調査への回答は 5 団体)
※アンケート調査は、多摩川オンラインシンポジウムへの参加予定団体への事前インタビューとして回答を収集したため、不参加であった活動団体からのアンケートへの回答はない。またシンポジウムに参加した団体では、当日回答するとして、アンケート調査への回答が得られないところも 3 団体あり、当日回答いただいた内容を記載している。	

3-2. コロナによる各水辺の活動の変化

以下から、調査を行った各水辺の活動におけるコロナ禍における水辺の活動の変化について表 3-2、表 3-3 に示す。得られた回答から次のことが明らかとなった。

表 3-2: コロナ後の水辺の活動の変化

No	名称	活動頻度	活動	中止した活動	継続/制限して実施した活動	活動実施への工夫
3	平井川こども水辺	毎月(自然観察会)	・8月:いかだを作って川下り ・10月:平井川ハイキング ・11月:やちよう観察 ・12月:川のそうじ&すいとん など	・(2020年)4-7月の自然観察会は中止 ・外のプログラムであるイカダ下りは中止して、ガサガサに切り替え(他との兼ね合いも考えて自粛) ・行政と一緒にやっていた1月のプログラムは見送り	・8-12月にかけての自然観察会はプログラムを変更。室内に切り替え、食(すいとん)提供は中止。 ・孵化殻調査は継続して実施。 ・1-3月のカレンダーづくりは広めの会場を抑えて実施。	・プログラムの変更、切り替え
4	福生水辺の楽校	約月1回(4月~2月)	・5、12月:バードウォッチング ・6、9月:魚のつかみ取り ・8月:いかだで冒険、多摩川で遊ぼう など	・(2020年)4月から7月にかけて活動を中止(緊急事態宣言下のため)。また(2020年)1~3月の3回分の活動は、緊急事態宣言に伴い未実施(12月の内から中止した活動も) ・また飲食を伴う活動は感染症対策の観点から実施せず	・(2020年)8月から全12回の活動(例年は年16回)を計画していた。 ・今年度の参加人数は保護者を含めて394名(2019年度は682名)参加人数は昨年度対比で減少したが、各活動におけるお申込みは例年よりも多かった。 ・参加人数を制限せざるを得ない活動もあった	・三密を避けるため、雨天中止とした(例年は雨天時には屋内での代替活動を実施) ・水辺の楽校ではないが、新たにチェンソー隊の活動を実施(台風・大雨による被害軽減、防災や近隣住民の交流を目的)
5	あきしま水辺の楽校	年10回程(5月~9月)	・5月:初夏の草花調査(総合学習) ・7-8月:いかだ、カヌー教室(メインイベント) など	・小学校の総合学習は中止 ・カヌー教室は台風の影響もあり中止	・草刈り等の環境整備(月1回、メンバーで実施)	
14	かわさき水辺の楽校	約月1回	・7-8月:投網体験・川流れ、湧水で川遊び ・9-10月:魚つかみ、魚つり など		・多摩川河口干潟観察会15名、二ヶ領用水魚つかみ50名、二ヶ領ガサガサ体験50名を例年と比して少人数として実施	
15	狛江水辺の楽校	毎週	・通年:清掃活動、生き物観察 など	—	・毎週行っている環境保全作業は自由参加のため継続して実施。 ・湧き水枯れて、浚渫作業をしてもらい、水路を取り戻す活動を行う	
16	きぬたまあそび村	毎週	・きぬたま活動日(月・水・金・土) ・ツリーハウスPJ ・プレーワーカーと水辺の遊び など	・緊急事態宣言で2020年4~5月は休園(この間インスタグラムなどSNSで、自然遊びや体遊びの情報配信) ・食べ物のイベントは全て中止	・2020年2月の休校措置後、3月まで子どもたちの居場所として毎日開催。6月から活動を再開し毎週4日通常開園(世田谷区と話し合い飲食イベントは自粛) ・告知は大々的に行わず、SNSのみを利用し周知を狭める ・台風後の遊び場の整備「原っぱリメイクプロジェクト」を地域に声かけして世田谷区の助成金を受けて実施(森遊クラブさんの協力で子どもたちと奥多摩に間伐体験に行き、3ヶ月かけてツリーハウスを再建。現在はピオトープ整備)	・参加者の個人情報を収集・管理して何かあった時の連絡等に役立てる ・例年よりもスタッフ数を増やし、活動範囲も広げ、距離を保つように工夫
18	とどろき水辺の楽校	約月1回(4月~2月)	・10-11月:二子の渡しまつり10月、体験11月 など	・カヌー教室は中止(コロナではなく前日の大雨のため) ・食体験の活動は中止。丸子の渡し祭りは公募を中止。	・3校合同干潟観察会は人数を大幅に制限しながらも実施 ・食体験をなくして凧揚げや二子の渡し等を実施 ・丸子の渡しは記念セレモニーのみ人数制限して開催 ・昆虫観察会、川の安全教室(活動美を振替)実施	・人数制限(公募をしない)
19	うのき水辺の楽校	約月1回(4月~2月)	・4月:春の鳥と草原の観察会 ・5月:川崎の大師河原干潟観察 ・6-7月:ガサガサ など	・大人数を集めての自然観察会(ガサガサ・生き物調べ・野鳥観察・昆虫観察)。人数制限をして計6回実施。 ・町会掲示板へのポスター掲示は中止。 ・小学校へのチラシ配布も制限(10校から4校へ)	・ガサガサ(3回実施。9-11月は人数制限して実施) ・子どもスタッフ研修(2019年~実施)は少人数のため実施 ・嶺町小学校との連携 ・水辺の楽校シンポジウム(ZOOMに変更。例年行っている川崎市のシンポジウムに加えて、スイスとZOOMをつないで野鳥報告会)	・人数制限(例年200人を超えるガサガサは30-40人に制限) ・QRコード等を使って参加者を管理 ・ZOOMを利用して国を超えた野鳥報告会の実施
21	だいし水辺の楽校	毎週	・5-11月:干潟観察会(3校合同・5月) ・8月:自由研究 ・9月:ハゼ釣り など	—	・干潟観察会等を感染症対策をして継続実施 ・定員を設け(20人程度)、家族単位で実施する、青空教室を実施するなどの工夫をして行う	・人数制限、感染症対策に加え、室内でおこなっていた生物解説等を野外で実施
22	羽田水辺の楽校	月2回	・4-9月:(隔日)干潟の定例観察会、清掃・保全活動 ・夏:サマースクール など	・2020年4、5月は干潟観察会を中止(6月から再開) ・台風の影響を受けた干潟はヘドロが溜まり足を踏み入れることが難しくなり、シジミやヤマトオサガニが見られなくなった	・定例通りの干潟観察会、野鳥観察会は実施 ・近隣小学校の野外授業(出前授業、サマースクール)は実施(一部ガサガサは中止)	・休止の間はメンバーで連絡を取り合い、冊子・チラシ等の作業を分担

表 3-3: コロナ後の子ども・地域の変化および、多摩川で遊ぶ未来の子どもたちへのメッセージ

No	名称	子どもたちの様子	地域との関係の変化	未来の子どもたちへのメッセージ	オンラインシンポジウムへの意識
3	平井川こどもの水辺	—	—	—	・日程合わず参加は難しい
4	福生水辺の楽校	<ul style="list-style-type: none"> ・例年に比べ、各活動における申込み人数は多かったように感じる(安全面等から参加人数は制限)。 ・あまり参加者の集まりにくい内容の活動でも、多くの方から申込みがあった。 ・今年度が初めての参加だという方が多かったことも特徴。度初参加の方も、その後の活動でリピーターになってくれる状況が多く見受けられた。活動を楽しんでいた証左であるとともに、結果として参加者の裾野が広がる年となった。 ・参加者増加の理由として、学校や行事等の自粛が続く中で実施したため、人気が集まったものと考えられる。 ・市が関与している活動であるため、参加するに当たって感染症対策等の観点で安心感が生まれやすかったとも推測。 	<ul style="list-style-type: none"> ・例年、活動拠点の町会が実施しているイベントに水辺の楽校が参加させていただいている活動があるが、今年度は町会のイベント自体が中止となった。 ・また例年は多摩川流域の他の水辺の楽校等にバスで同ツアーを実施していますが、今年度は感染症対策のため計画せず ・例年6月に開催している「ふっさ環境フェスティバル」というイベント内で、漁協の方の御協力の下、マスのつかみ取りを実施しているが、今年度はイベント自体が中止に 	<p>多摩川は、上流から下流までの間で、全く異なる景色を見せてくれます。そして、その多くの場所において、自然環境と人々の営みとが近くに存在しています。水辺の楽校の活動を通じて、多摩川やその周辺の自然環境に親しみ、興味を持ってもらうと同時に、一人一人が生活する場としての多摩川も知ってもらえると思います。そして、自然を愛する心や生命を大切に、仲間と協力し助け合う心を育ててほしいと思っています。</p> <p>いずれ、いま活動に参加している子ども達が、地域社会における様々な分野のリーダーとなり、次世代を切り開くパイオニアとして、自然環境豊かなまちづくり携わってほしいと考えています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他のイベントと重なっているため、他のメンバー等に呼びかけてほしい。活動趣旨には賛同。
5	あきしま水辺の楽校	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩川は危険なところもあるが、大分水もきれいなになり、みどりや川の中で育てほしい ・子どもたち、孫たちと一緒に川に入って楽しみたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・通信機器に詳しい人に聞いてみる ・後日メンバーを集める説明の機会を設ける
14	かわさき水辺の楽校	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者を限定したため少人数で中身の濃い活動ができた。子供たちは、余裕をもって楽しんだよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地元の小学校との定期的活動が中止となった(せせらぎ館水槽の清掃や館運営の学習など) 	<p>多摩川は身近な自然であり、貴重な自然空間を体感してもらいたい。更に、多摩川の歴史学習や動植物の観察、自然と触れ合う遊びの体験など、日ごろから多摩川に足を運び親しんでほしいと思います。多摩川は水質も大変良くなっています。世界の子どもたちを呼んで、川遊び大会が出来たらいいと思います。</p>	
15	狛江水辺の楽校	<ul style="list-style-type: none"> ・学校が休みの時にはたくさんの親子が訪れてキャンプなどを楽しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・湧き水が復活、地域住民によるくい打ちをして水路を作成した。 ・狛江水辺の楽校は開校して20周年となり、のべ6万5千人の子どもがこの水辺を訪れている 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなアナログ体験をしてほしい。実際に水辺を訪れて、転んで、泥をかぶって、実際の自然に触れてほしい 	<ul style="list-style-type: none"> ・代表が参加する。日程の都合でいつものメンバーは集まらないかもしれない。
16	きぬたまあそび村	<ul style="list-style-type: none"> ・例年に比べ、イベントの参加者は増えた。 ・活動に対して積極的に参加できるイベントを探しているようだった。 ・川遊びのイベントでは、リピーターも多く、全身で全力で楽しむ子どもたちの様子が印象的。自粛のストレスを上手く発散できなかったり、気持ちをどう表に出していかなかったり、夏休み前後は子どもたちのぎこちない様子も見受けられたが、1年かけて落ち着いてきたように思える。 ・学校のプールもなかったため、川あそびには大勢の参加がありました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3密を避けるということから、身近な多摩川の存在が見直されていると感じる。 ・小学校の授業協力は実施でき、先生方が研修で初めて川あそびに参加。 ・地元町会の鎌田南睦会のご協力も、規模を縮小して実施できた。 ・単発の大きなイベントを抑えた分、じっくり地域の子どもたちと、保護者の方々と、遊び場の環境を整えることができた。それでも、毎年の地域(児童館や商店街のお祭りなど)のイベントがなくなった分、例年のような関わりは少なかったように感じる。 	<p>多摩川は、子どもたちの身近にあり、「生きる力」を育むための遊びを豊かにしてくれます。また、自然の楽しさも布さも教えてくれるものです。台風が多摩川氾濫で遊び場が土砂で埋まり、悲しい想いも、一方で、多摩川の自然を借りて遊び場(ツリーハウスなど)を作ったり、生き物との出会いを楽しませてくれ、都会ではなかなかできない貴重な体験をさせてくれる。</p> <p>コロナ禍でありながらも、変わらず迎えてくれて子どもたちを笑顔にしてくれました。未来の子どもたちにとっても、お互い大切に出来る関係であってほしいと願っています。多摩川の水辺も戻れば、たくさんの生きものと出会う貴重な場所です。一度は生きものの棲めない死の川となりましたが、多くの人の手で守り復活した奇跡の川です。今はきれいな川になった多摩川でたくさん遊ぶことで自然の楽しさを実感して、大切な場所をいっしょに守っていきましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・財団独自の活動として多摩川のネットワーク活動やイベントをぜひ行ってほしい
18	とどろき水辺の楽校	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・活動風景を中継するためにメンバーと日程調整(車列り活動)してみる。
19	うのき水辺の楽校	—	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の方々へのき水辺の楽校の活動を知っていただけよう、町会の掲示板に自然観察会・参加者募集を広く呼びかけるポスターを貼り出していたが、コロナ禍で参加人数の制限もあり、ポスターなどの広報は控えている。そんな中でも、昨年までご協力いただいた地域の方々には、うのき水辺の楽校の活動を見守っていただいている。 	<p>質問を次のように読みかえる。『私たちの未来に実現したい多摩川』大都会の河川の汽水域に目を向ければ、生き物たちは豊かに生息している。水がきれいだった昔の多摩川のように自然が豊かで、子供たちが安心して安全に川遊びができる多摩川を実現したい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・趣旨は理解。しかし方法はより工夫が必要。実況中継でないだめか。写真やビデオも使って活動紹介する方法もある
21	だいいし水辺の楽校	<ul style="list-style-type: none"> ・感染予防のために実施した家族単位での参加方法は、アットホームな雰囲気を感じた。 	—	<ul style="list-style-type: none"> (干潟では色々なことが起こっている(干潟の生き物チヂ、ゴカイ、カニにとって大事な泥、ルアーに引っ掛かりケガをする鳥たち)を知ってほしい)※アット紹介より 	<ul style="list-style-type: none"> ・趣旨には賛同。ネットワーク環境や機器がないため準備をお願いしたい
22	羽田水辺の楽校	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回、顔を出さず子供たちがいるのはうれしい。カニを触るのも怖いという子供たちもいるが、やがて慣れ、皆、興味津々で、とても楽しそう。子供たちは、毎回新しい発見をしている。こうした子供たちがもっと増え、体験学習を通して身近なところにある自然に親しんでほしい。 ・夏休みの活動は参加者が多く、夏のイベントが減ったことの影響を感じた。 ・屋外での活動、特に友達と一緒に活動できるようにしたい。 ・授業支援では、学校からの移動と河川敷や干潟での活動で、子どもによってかなり疲れている様子が見受けられた。年々暑さが厳しくなるので、春や秋でも暑さ対策に気をつけたいと危険だと感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人々の大半が、すぐ近くにある多摩川の水辺の生き物や多摩川のごみなどについて日ごろ「知る」機会がないことを実感。機会あるごとに話をしたりして情報を流すようにしている。心無い人々が、今も、多摩川にごみを捨てるのは残念。こうした人こそ活動に参加してほしい。 	<p>私が子供の頃、洗剤の泡だらけだった多摩川に鮎が戻ってきたというニュースを見て、人は環境を汚すだけではなく綺麗にすることもできるのだと、とても感動しました。今はゴミだらけの太子橋干潟も、みんなで力を合わせれば、きっと裸足で遊べる生き物がいるだけの環境を取り戻せるはず。一人では出来ませんが、みんなの力が合わされば、とても大きな力になります。自分のため、未来のために、安全で美しい干潟や河川敷にしていくため、より多くの人に多摩川とその環境を好きになってもらいたいです。高度成長期には工場や家庭からの汚水で臭った多摩川。今、きれいな川になり多くの生き物が戻ってきたという多摩川から、自然を壊してしまうのは私たち人間なんだということを考え、一人ひとりが自然と共生して生きることの大切さを考えられる大人になって欲しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・活動メンバーへシンポジウムへの参加を呼びかけてみる。

(1) コロナによる活動の変化

東京・神奈川等の首都圏における 2020 年度の緊急事態宣言は 2 回発出された（1 回目：2020 年 4 月 7 日～5 月 25 日、2021 年 1 月 8 日～3 月 21 日）。これに伴い、水辺の楽校の活動も聞き取りを行った多くの団体で予定していた活動を中止している【3.4.5.16.18.22】。コロナ後は、参加者との距離が近くなるイカダ下り・カヌー教室【3.5.18】や、参加者が大勢集まるガサガサ【19】、自然観察会【3.19】等を中止する団体があった。

特に、飲食を伴う活動については感染症対策の観点から実施を自粛するところが多くみられた【4.16.18】。野草の天ぷらやヨモギ団子づくり、お祭りの出店といった水辺での野外飲食は、活動の大きな魅力の一つであり、子どもたちの大きな楽しみでもあったが、このような活動は感染症拡大により大幅に制限を受ける形となった。また大勢の子どもたちや親子で賑わう野外でのガサガサや自然観察イベントも人数を制限しコントロールしなければ、実施は難しい状況となっている。

(2) コロナによる地域の子どもたちの変化

緊急事態宣言が発出されるより前から、全国の小・中・高等学校、特別支援学校では臨時休校が要請されており（3 月 2 日から春休みにかけて臨時休校するよう 2020 年 2 月 27 日に政府要請）、水辺の活動を行う団体では、地域の子どもたちが普段の生活や遊びについて我慢や負担を強いられている様子を気にかけてきたことが伺える【4.16.22】。

一方で、少人数・家族単位に参加の方法を切り替えたことから、よりゆとりをもちながら親密な活動ができた【14.21】といったことや、これまで水辺の活動に参加していなかった新しい参加者を呼び込め、リピーターとなってくれた【4】等、今般のコロナをきっかけとして活動に対する新たな側面や状況を見出している団体もみられた。

(3) コロナによる地域との関係の変化

コロナの影響により、小学校との定期的な活動が中止される【14】、学校等に毎回行っていた広報活動を制限する【19】、地元自治会・町会、漁協との例年の地域行事への参加や協力、イベントが中止される【4.19】など、季節的・定例的に繰り返し行われてきた活動の一時中断や見直しがあったことを確認することができた。地域に根差し、恒例・定番のイベントや協力関係を構築するためには長く粘り強い活動の継続が必要であるが、これらが一時的な停止を余儀なくされている。しかし、一定の制限や工夫を設けながら小学校との活動を継続するところもあり【16.19.22】、このような状況下であってもこれまで築き上げてきた信頼関係や連携は形を変えながら現れている。その中で、多摩川や水辺の活動の価値が見直されている（次項（4））。

(4) 未来の子どもたちへのメッセージ

次章にて詳述する多摩川オンラインシンポジウムの現地インタビュー内容の一つとして、多摩川の未来のカップ（子どもたち）に対するメッセージや想いを寄せてもらおうと（図 3-

1)、長きにわたる活動を、過去から未来、世代・時代を超えて渡しながら、豊かな多摩川をとどけたい【15.19.22】といった想いを確認することができた。かつて立ち入ることができないほど汚れていた多摩川が人の手によって回復してきたこと、またこのコロナ禍では、多摩川が地域の人々の心を癒してくれたことから、川と子どもたちがお互いに大切にしたい関係でありたい【4.16.21】という想いも寄せられた。また遠隔地でのコミュニケーションをはかることが日常化し、国際的な報告会の実施などの試みもみられ【19】、身近な取り組みから世界の子どもたちへの視点までその意識や活動の広がり【14.19】も把握することができた。



図 3-1 未来の子どもたちへのメッセージ

3-3. 本章の調査まとめ

本章の内容は、コロナの影響から十分に行うことができなかった研究期間後半の調査活動に対する代替調査であった。しかしコロナ発生の前後における活動内容の変化や地域とのつながり、子どもたちの様子の変化等を部分的にはあるが確認することができ、またコロナの影響による制限を乗り越えるための工夫や、これらの取り組みを通じて見出された活動や地域に対する新たな気づき・発見も捉えることができた。このような個別の活動における新たな気づきや発見を、同じ多摩川流域で活動する主体間で共有しながら、改めて多摩川や水辺の活動の価値を捉え直すために、次章で記述する多摩川オンラインシンポジウムの企画立案を行った。

4. 水辺の風景と価値の同時多元的共有—多摩川オンラインシンポジウム実施

前章における調査結果を元に、水辺の活動に関わる一主体として関わりながら、水辺の活動の価値を実践者と共に考えるための場づくりを行うために、オンラインシンポジウムを企画立案し実施した。同シンポジウムは、各水辺の活動風景を共有しながら、コロナ後の現在の活動状況や地域の子どもたちの様子、そして多摩川で遊ぶ未来の子どもたちに向けたメッセージを交換しあうことを目的としている。

以下から、多摩川オンラインシンポジウム実施に至るまでの活動団体との検討プロセスを記述しながら、2021年3月に実施したシンポジウムの概要および同会に対するアンケート調査結果等を示し、水辺の活動主体におけるシンポジウム実施前後の意識変化を捉える。これらを通じて、シンポジウムを評価しながら、流域連携の可能性について考察を行う。

4-1. 多摩川オンラインシンポジウムの概要

(1) 実施までのプロセス

多摩川オンラインシンポジウムの企画立案、検討、実施に至るまでのプロセスを簡潔に示したものが表4-1である。第1回目の緊急事態宣言の解除後に、水辺の活動を再度訪問し参与観察を再開しながら、本研究で当初計画していた流域単位での交流会の実施可能性を検討し、コロナ後の活動状況を踏まえた上での開催方法やこの状況下における開催意義を、水辺の活動主体と共に話し合いながら進めてきた。水辺の活動主体へ同交流会の企画を投げかけた当初は、その趣旨に賛同や理解を示していただいたものの、近年の台風や大雨、そしてコロナへの対応を行いながら活動現場の切り盛りで手一杯という状況で、交流会実施に対する懸念も多くあった。また水辺の活動発足時の支え合いや交流は、以前よりやや薄れる中で（第2章参照）、新たな交流の形を期待する声を伺うことができたが、これまでの連携の仕方との違いがどこにあるのかなどの疑問や意見もいただいた。

上記を踏まえながらも、まずは試行的に実施しながら検討を行うことを目的として、2021年1月に水辺の活動主体との協力の下、多摩川をはさんだ2つの中継場所をオンラインでつなぐシンポジウムを実施した（図4-1）。

表4-1 多摩川オンラインシンポジウム実施プロセス

年月	プロセス
2020.6-8	水辺の活動への再訪問、参与観察の再開
2020.9-10	多摩川流域の水辺の活動主体間の交流会を企画
2020.11	オンライン企画案に関する相談/ZOOM・訪問
2021.01	テスト実施・2団体（かわさき水辺の楽校・きぬたまあそび村）
2021.02	現地ファシリテーター準備（学生の水辺の活動訪問・1.2名、代表者との面談）
2021.03	第1回多摩川オンラインシンポジウム・8団体



図 4-1: 多摩川オンラインシンポジウム(1月・テスト実施)の概要

2 団体の協力を得て実施した 1 月のオンラインシンポジウムのテストでは、運営やインタビュアー役を担う現地ファシリテーターを 2-3 名配置して、各活動の代表者やメンバー間で最近の活動や現地の様子、お気に入りの多摩川の風景をお互いに紹介し合い、現在における多摩川の価値や水辺の活動の価値について意見交換を行った。感染症対策も兼ねた、少人数かつ野外での普段の活動場所の風景をオンライン上で見合いながらお互いに伝えあう、という手法が功を奏し、最近の子どもたちや小学校等の地域の様子を交えながら、活動をざっくばらんに楽しく話しあうことができ、ほかの団体も交えてより広範囲での実施に向けた前向きな検討を行うことができた。また現地ファシリテーターを配したことで、短時間のシンポジウム前後の意見交換は生き生きとしたものとなった。

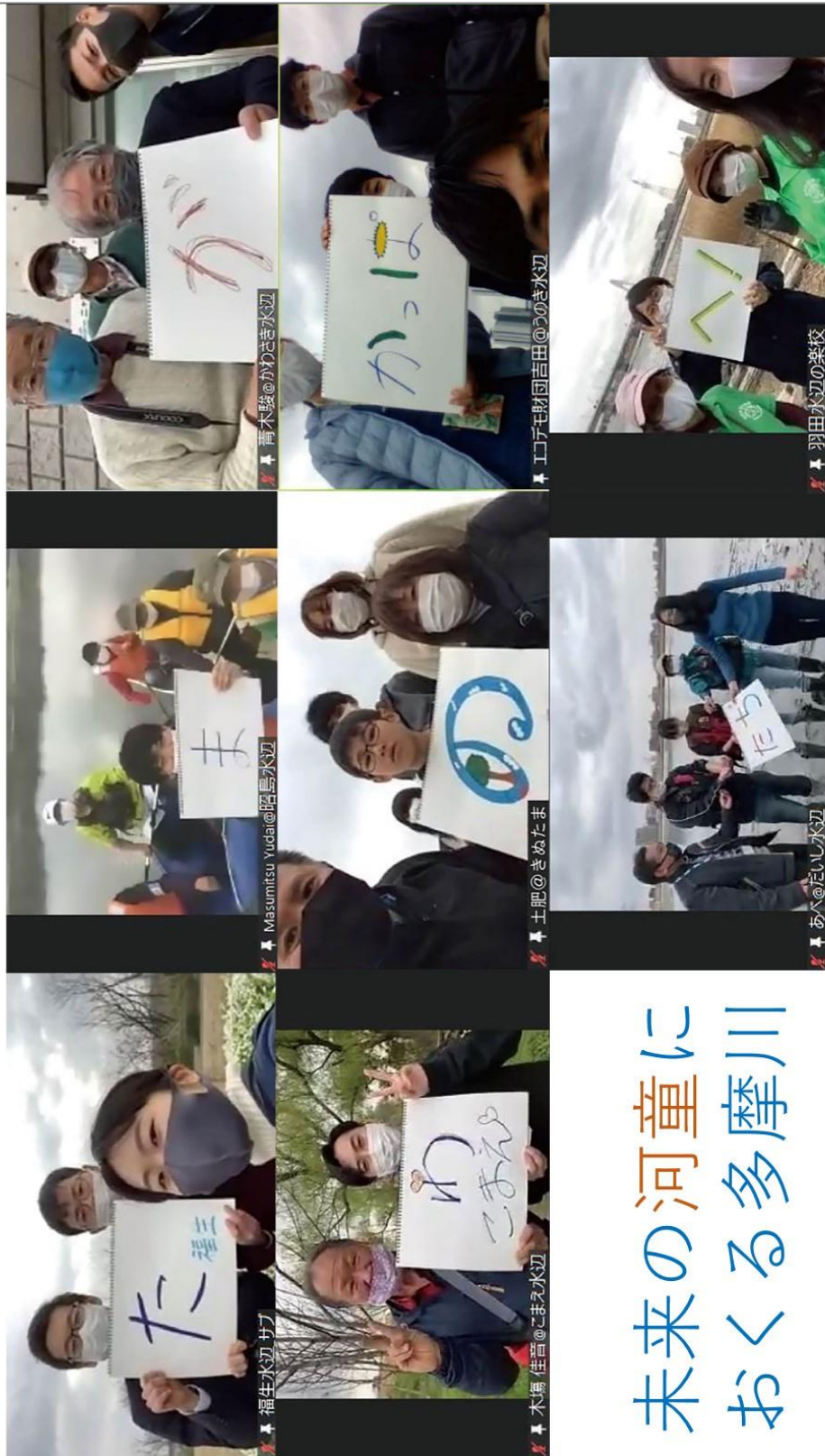
このテスト実施を踏まえて、多摩川の水辺の活動団体に協力を呼びかけながら、現地ファシリテーターの準備を行った。コロナの状況や呼びかけ期間の設定の短さから、多摩川流域で活動を行う方々への企画周知や説明、声かけ等が不十分ではあったものの、2021 年 3 月に設定したオンラインシンポジウムには、8 団体から協力を得ることができた。

(2) 多摩川オンラインシンポジウムの実施

先に示した通り、第 1 回目の多摩川オンラインシンポジウムは、計 8 団体の協力の下、2021 年 3 月 20 日に開催した。概要について、協力団体をはじめ、水辺の活動団体への本企画紹介のために作成した報告書 (図 4-2 から図 4-6) を以下に示す¹⁰。

¹⁰ 当日の多摩川オンラインシンポジウムは、本調査研究通じて作成した以下のウェブサイトでも紹介。同ウェブサイトは、エコロジカル・デモクラシー財団と東工大有志メンバーによるプロジェクト (継続的な水辺の活動訪問やシンポジウム等) を展開しながら、本サイトを情報発信プラットフォームとして活用できることを企図して作成した。多摩川かっぱプロジェクト HP : <https://ecodemotamagawa.wixsite.com/website>

多摩川オンライン・シンポジウム：第1回3月春・2021.3.20



主催：一般財団法人エコロジカル・デモクラシー財団

図 4-2 多摩川オンラインシンポジウム報告書(表紙)

■ 企画背景

私たちエコテモ財団では、2019年度の重要財団・学術研究部門の研究助成「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」をいただき、多摩川の水辺の活動と、地域や子どもたちとのつながりの形を明らかにし、それらにより作られている水辺や多摩川の価値を活動されている方々と一緒に測定することを目的として調査・研究を行ってきました。

■ 趣旨：

COVID-19の感染拡大により人と人、人と自然・社会との新たな関係構築が問われる中、多摩川の水辺の活動もその参加の形を変えながら水辺や多摩川の価値を新たに生み出していると考えます。そこでオンラインで同時に多摩川の水辺の風景を共有しながら多摩川と水辺の活動の価値を確かめることを目的として、今回のシンポジウムを企画いたしました。

■ 現地中継先：8団体

- ① 福生水辺の楽校 (活動メンバー1名・学生2名)
 - ② あさしま水辺の楽校 (活動メンバー9名・学生2名)
 - ③ かわさき水辺の楽校 (活動メンバー4名・学生1名)
 - ④ 船江水辺の楽校 (活動メンバー2名・学生2名)
 - ⑤ きぬたまあそび村 (活動メンバー9名・学生2名)
 - ⑥ うのき水辺の楽校 (活動メンバー6名・学生2名)
 - ⑦ たいし水辺の楽校 (活動メンバー9名・学生2名)
 - ⑧ 羽田水辺の楽校 (活動メンバー2名・学生2名)
- ※ 中継本部：東工大 (スタッフ1名)



■ プログラム

1. はじめに：中継先のご紹介

- ・現地8か所の接続確認と自己紹介
- ・シンポジウムの概要説明

2. あいさつ：

- ・一般財団法人エコロジカル・テモクラシー財団・代表理事 土肥真人より趣旨説明
- ・公益財団法人東急財団・事務局長 岡師真吾さまよりご挨拶

3. アートワーク解説

- ・アートワーク解説 (目的、方法、後ほど作品紹介)
- ・アートワークの解説を兼ねて、メッセージづくり記念撮影

4. 現地インタビュー：下流から

- ◆ コロナ禍の現状を現地風景を交えてリレー中継
- (1) 最近の活動、課題 (2) 子どもたちの様子
- (3) 地域とのつながり (4) 子どもたちに話す未来

5. アートワーク紹介：上流から

- ◆ アート作品紹介 (タイトルとメッセージを紹介)
- ・アートワークを全体で眺める
- (1) 一覧紹介、(2) 地図上で確認一全体メッセージ

6. おわりに：参加者からご感想

- ・参加者からご感想
- ・参加のお礼、次回案内



オンライン中継の様子 (上段)
当日の各中継場所の風景 (下段)

図 4-3 多摩川オンラインシンポジウム報告書(企画概要)

■ 参加者の感想：実施後アンケートより（一部を紹介。また内容を要約）

シンポジウムに参加してのご感想・ご意見

羽田水辺の楽校
 つつもな少しの傾りと残念な気持ちを持ってしまいがちな清掃活動も、アートワークの協力のおかげで、大きなコマも「良い材料みつけた！」と楽しみなからできた。また他の水辺の楽校は、思った以上に整頓されていることに驚きながら、羽田水辺は、ゴミが大量多いと感じる一方、手付かずの自然も1番残っているのかもしれないと感じ、活動へのやりがいも再確認できた。

羽田水辺の楽校
 自分たち以外のボランティアグループとの交流ができてよかった。いつか一同に集まってるの機会交換をしたい。

学生スタッフ(羽田水辺の楽校)
 8箇所から中継をつないで、リアルタイムでどんなことをしているのかを知れたのが面白かった。地点ごとの色が出ていて、同じ川で生活する者同士認識することができている良い機会になったと思う。

参加者(東急財団)
 コロナ禍での新たな取り組みの工夫として評価できる。

他地域の取り組みで聞いてみたいこと、紹介したいこと

羽田水辺の楽校
 コミの処理について、皆さんがどうされているか知りたい(でもそもそんならにゴミがなくてもいいかも)も、ぜひ他の楽校の皆さんにも体験してもらいたい。清掃活動も観察会も、ぜひ他の楽校の皆さんにも体験してもらいたい。流れ着いたゴミも多いので、まさに川がつかっていてもお互いに無関係ではないことを感じてもらえたら。そんなら知ってもらえたら嬉しい。

羽田水辺の楽校
 8ヶ所の活動現場の中で、ゴミやブルーシート問題は全くなかったのか、あるいは過去にあったが解決済みなのかを知りたい。解決済みならどうやって？

多摩川の流域単位でやってみよう

羽田水辺の楽校
 生物(植物)の生育調査ができたらやってみよう。決まった時間で何が見つけられるか、同時にやって結果を共有できたら面白い。

羽田水辺の楽校
 他の活動場所と比べ、多摩川下流は整備が進んでいないことが判ったが、できれば自然のままの状態ですべて子供たちが裸足になれるような状態として残したいと期待と話し合っていた。

スタッフ(本部)
 上流から下流に至るまで、水質と生き物(水中・河川敷)をみんなで調査して、その違いを見てみたい。

きぬたまあそび村
 広い流域を行き来せずとも、自分たちのフィールドに居ながらにしてつながれる良さを実感、それぞれの環境の特色と日常の活動の様子がお互いへ向かっていた。

羽田水辺の楽校
 かつてのように上下流・左右の楽校が一堂に会する機会が希薄になった現在、他の団体の様子もリアルタイムでわかりたい、みんな励みになった。

福生水辺の楽校
 他の水辺の楽校との情報交換や共有を図れる非営利に良い機会、特にコロナ禍においていかに子ども達に環境教育を推進するか、各団体がそれぞれ工夫されていることが分かり、楽しさを感じるのと共に自身も反省された。

学生スタッフ(あきしま水辺の楽校)
 個人的には反響点が多かったけども楽しめたが、多摩川のいろんな団体と同時中継できたことにも感動、ポータルに乗れたことにも楽しかった。

きぬたまあそび村
 コロナが落ち着いたら、子どもたちとハゼ釣りに行きたい。

羽田水辺の楽校
 かつては清流体験教室(小書村)や河口干潟のガタガタがタガタ体験教室(辰野平島)を企画運営していたが、最近ともにも単独主催が難しくなった。大前や福生との協力も、子どもや親子の受け入れ支援ができればいいなシステム・体制が再構築できたら。

福生水辺の楽校
 子ども達が参加している水辺の楽校の活動もぜひ紹介したい。他の水辺の楽校の活動もよく見てみたい。(今回も、お子様が出席されている団体さんが、非常に楽しかったです)

かわさき水辺の楽校
 水辺の楽校を中心に多摩川を築き上げる他の活動も探して、映像化できたら。アートを記した多摩川地図上の団体設備が良かった。

きぬたまあそび村
 流域全体の活動を紹介するWebサイトづくり(流域マップ、活動紹介、カネコライズ、団体リンク)

福生水辺の楽校
 テーマをさらに絞って各流域の特色を紹介しよう(例えば、河川に住む生物の種類や自生している植物の種類、河川敷の岩石や泥の構成、またそれぞれの特徴を活かした水辺の楽校の活動、等)。コロナ収束後になるかと存じますが、他の水辺の楽校と実際に行動を来する(バスツアー等)。

参加者(学生)
 多摩川の流域全体で一つのアート作品を作るなど面白そうだなと思ったり、例えば各エリアから、それぞれ石や葉っぱなど何か一つ持ち寄って、流域全体で一つの大きなアートを作るイメージ)

学生スタッフ(羽田水辺の楽校)
 各場所で楽しく個性的に紹介してくれて、イベント作りもアイデアがばばばと出てきてくれた。羽田水辺は、出来上がり、余裕を持って中継できた。個人的には、会の前にも水辺のことを色々教わることができるとも楽しかった。

スタッフ(本部)
 各地の活動を垣間見ることができ、活動している人の顔が見え、さらに楽校活動した方が水辺で成長していることを知り、とても楽しい・嬉しい気持ちになった。また、上流と下流の水辺の状況や活動内容が異なることも伝えてもらったことがよかった。

学生スタッフ(うのき水辺の楽校)
 上流から下流までの団体が一堂に会するスケール感に圧倒、個別の水辺の楽校に参加するのは見えない魅力が異なる、地域による魅力や特色の違い、それぞれの文化などを互いに共有できることは大変有意義であったように感じた。

スタッフ(本部)
 もう少し上流では、より声や活動内容が異なると思う。その辺りを聞きたい。

参加者(学生)
 ほかの流域の水辺の楽校ではどんな遊びをしているのか気になる。

学生スタッフ(うのき水辺の楽校)
 羽田エリアのアーアート作品が他とは一風変わっており、非常に興味深かった。人間が出すゴミも河川の景色を作る要素なのだという事を知り、改めて認識した。

学生スタッフ(あきしま水辺の楽校)
 羽田の方々に教えて頂きましたが、上流から下流まで一気にくだるポータルを一度他の団体に協力してやってみたい。



羽田水辺の楽校
 「流域一斉、川流れリレー交流」「オリオンピック前に多摩川を清掃する一斉美化清掃」「在来種保全の一斉アレチウリ駆除大会」など、単独では当り前の活動を流域全体で取り組むイベントができれば面白い

参加者(学生) 所谷
 川下り、サイクリングなどを動かして流域を知れるアクティビティ。家から200mくらい先が多摩川と鶴見川の流域の間に山から下りてきて、川に集まるようなところもできないか、と考えていました

図 4-4 多摩川オンラインシンポジウム報告書(実施後アンケート)

■ 現地インタビュー
(ホームページ上では、現地中継の風景をクリックすると動画再生)

福生水辺の楽校
車に聞けるイベントができなかったことは残念ですが、例年よりも多くの関心が水辺に寄せられ、新たなリポーターもできました。自然を通して関心と協力して助け合う心を水辺の活動を通して学んでほしいです。

あきしま水辺の楽校
自然環境の回復してきた多摩川で、水や緑を感ぜながら、いい大人になってほしい。夏には家族で遊びながら活動もできるように、コロナが収束するここことを願っています。

かわさき水辺の楽校
コロナの影響で、活動への参加者を限定し少人数で実施。普段より少ない人数のため、より中身の濃い活動ができました。身近で貴重な多摩川の自然を体感して、日頃から楽しんでほしいです。

うのき水辺の楽校
子どもスタッフの二人から子どもスタッフ研修の活動や町会との関係、そして多摩川のハゼやアオサギの生態について詳しく報告。未来の子どもたちが安心して遊ぶことが出来るよう、かなできれいな多摩川していきたいです！

きぬたまあそび村
子どものうちに、川沿いでたくさん遊んでほしい。自然環境と触れ合う楽しさや怖さを伝えてくれる多摩川を、未来の子どもたちが大切にできる関係性であってほしい。

羽田水辺の楽校
今はコロナだらけの太子橋干潟も、みんなで力を合わせれば、さっと生き物がいっぱい集まる環境を取り戻せるはず！子どもたちが満足になって干潟で遊べる環境を作っていきたい！

あまがさき水辺の楽校
おまの影で抱れていた湧き水が復活！地域住民と一緒にくい打ちをつくった水路も完成！カエルたちも戻って来ました。開校20周年を迎えるのへ6万5千人の子どもが柏江水辺に！

柏江水辺の楽校
二ヶ領せせらぎ ぎぬたま遊び村 とうろま水辺の楽校

いなぎ水辺の楽校
さぬか水辺の楽校

調布水辺の楽校
多摩市水辺の楽校

浅川清徳水辺の楽校
立川水辺の楽校

通台水辺の楽校
八王子浅川水辺の楽校

あまがさき水辺の楽校
あまがさき水辺の楽校

おまの影の水辺
平井川子どもの水辺

おまの影の水辺
おまの影の水辺

やぐちの水辺の楽校
うの

だいし水辺の楽校
羽田水辺の楽校

だいし水辺の楽校
たいし水辺の楽校

名インタビュー内容
最近の活動の様子、子どもたちの様子、地域との関係の変化、未来の子どもたちへのメッセージ

図 4-6 多摩川オンラインシンポジウム報告書(現地インタビュー)

(3) シンポジウムの評価と流域連携に向けた意識

シンポジウム実施後アンケート調査の結果を表 4-2 に示す。アンケートでは、オンラインという特性を活かし、流域内の離れた場所の様子を同時中継でつないだことに評価と関心が寄せられた。当日普段の活動を行っていた団体もあり、現地の風景を見合いながら紹介できたこと、またアートを用いた表現にも評価が集まった。本シンポジウムを通じて、かつての上下流・左右岸の楽校が一堂に会する機会が希薄になった現在において、各活動の励みともなった、との声もいただいた。特に、現地ファシリテーターを学生に依頼し担ってもらったことが、各活動を多面的に考えるきっかけとなり、本企画への評価につながったものと考えられる。またこのシンポジウムを通じて、ほかの水辺の状況やこれまでの取り組みに対する関心を高めることともなった。

流域連携に向けた意識を把握するために、ほかの地域と協働して、あるいは流域全体でやってみてみたいことについて意見を伺うと、水辺の活動場所を実際に行き来する（バスツアー等）や、各流域の自然の地域的な特色を紹介しあうこと、単独では当たり前の活動を流域全体で取り組むイベントなど、流域全体へのイメージを膨らませた具体的な提案が寄せられた。また流域全体の活動を紹介する Web サイトづくり（流域マップ、活動紹介、カテゴリー、団体リンク）といった仕組みやツールの提案もあり、本研究活動の今後のステップや方向性を考える機会ともなった。

表 4-2 シンポジウム実施後の各水辺の楽校の意識

No	名称	シンポジウムに参加した感想・意見	他地域の取り組みへ紹介したい／一緒にやりたいこと	運営に関する意見（課題や不満、良かった点等）	多摩川の流域単位でやってみたいこと
4	福生水辺の楽校	オンラインによる中継を活用し、他の水辺の楽校との情報交換や共有を図れる非常に良い機会となりました。 特に、コロナ禍においていかに子ども達に環境教育を推進するかについて、各団体がそれぞれ工夫されていることが分かり、嬉しさを感じると共に自身も発奮されました。	実際に子ども達が参加している水辺の楽校の活動もぜひ紹介差し上げたく、また他の水辺の楽校の活動についても拝見いたしたく存じます。 (今回も、お子様が出演されている団体さんがあり、非常に楽しく拝見いたしました)	オンラインという特性を活かし、流域の様々な様子を同時中継していただくという非常に良い取組でした(コロナ収束後も活用できる手法か)。特に、今回スマートフォンをお持ちいただいたため、河川の様子を写した後に河川敷の公園に移動する等が可能であり、今後ますます発展できる企画かと存じます。	テーマをさらに絞って各流域の特色を紹介しあう(例えば、河川に住む生物の種類や自生している植物の種類、河川敷の岩石や泥の様子、またそれらの特徴を活かした水辺の楽校の活動、等)。 コロナ収束後になるかと存じますが、他の水辺の楽校と実際に行き来する(バスツアー等)。
14	かわさき水辺の楽校		水辺の楽校を中心に、他の団体で多摩川を楽しむ活動も、探して、映像化できたらと考えます。アートで記した多摩川地図上の団体映像、良かったです。		
15	狛江水辺の楽校	かつてのように上下流・左右岸の楽校が一堂に会する機会が希薄になった現在、他の団体の様子がリアルタイムでわかり、たいへん励みになりました。	かつては源流体験教室(小菅村)や河口干潟のガタガタ体験教室(殿町干潟)を企画運営していましたが、歳とともに単独主催が難しくなりました。大師や福生の協力を仰ぎ、子どもや親子の受け入れ支援ができるようなシステム体制が再構築できればと思います。	初めてのオンライン体験でしたが、担当の学生さんたちの気さくな誘導で楽しく新鮮な体験ができました。感謝。	「流域一斉、川流れリレー交流」「オリンピック前に多摩川を洗濯する一斉美化清掃」「在来種保全の一斉アレチウリ駆除大会」など、単独では当たり前の活動を流域全体で取り組むイベントができれば面白いかな。
16	きぬたまあそび村	広い流域を行き来せずとも、自分たちのフィールドに居ながらにしてつながれる良さを実感した。それぞれの環境の特色と日常の活動の様子が伺えたことが何よりだった。	コロナが落ち着いたら、子どもたちとハゼ釣りに行きたい。	スタッフの皆さんの臨機応変のアドリブ対応が、楽しい雰囲気づくりにつながった。	流域全体の活動を紹介する Web サイトづくり(流域マップ、活動紹介、カテゴリー、団体リンク)

No	名称	シンポジウムに参加した感想・意見	他地域の取り組みへ紹介したい／一緒にやりたいこと	運営に関する意見(課題や不満、良かった点等)	多摩川の流域単位でやってみたいこと
22	羽田水辺の楽校	<p>いつもなら少しの憤りと残念な気持ちを持ってしまいがちな清掃活動ですが、アートワークの財力集めと考えると、大きなゴミも「良い材料みつけた!」と楽しみを感じながら集めることができました。アートの力を感じて、楽しい体験でした。</p> <p>また、他の水辺の楽校の様子をほとんど知らなかったのですが、自然そのままというよりは、思った以上に公園のように整備されていることに驚きました。羽田水辺の楽校は、ゴミが1番多くて他の楽校の綺麗な様子が素晴らしいと感じる一方、手付かずの自然も羽田が1番残っているのかもしれないと感じ、ここでの活動のやりがいを再確認できました。楽しい企画をありがとうございました!</p>	<p>ゴミの処理について、皆さんがどうされているか知りたいです。(そもそもそんなにゴミがないのかもしれませんが。)</p> <p>また、清掃活動も観察会も、ぜひ他の楽校の皆さんにも体験してもらいたいです。ここで捨てられたゴミだけでなく流れ着いたゴミも多いので、まさに川がつながっていてお互いに無関係ではないことを感じてもらいたいと思います。そして、そんなゴミだらけの環境でも多くの生物が元気に育っている現状を、知ってもらえたら嬉しいです。</p>	<p>明るい進行で、楽しい雰囲気に参加できたのが良かったです。ハウリングや画面のフリーズが時々あったのが勿体ないと感じましたが、概ね想像よりしっかり繋がって、凄かったです。画面が反射して見にくかったので、同じような機会があれば、次は日陰を確保して折り畳みの椅子など用意したら、更に充実した時間を過ごせそうだと思います。</p>	<p>生物(植物も)の一斉調査ができたらやってみたいです。決まった時間で何が見つけられるか、同時にやって結果を共有できたら、ちょっと面白いかなと思います。</p>
		<p>自分たち以外のボランティアグループとの交流ができてよかったです。これからもこうした形での、あるいはいつか一同に集まったの情報交換をしたいと思った。</p>	<p>8か所の活動現場の中で、ゴミやブルーテント問題は全くなかったのか、あるいは、過去にあったが解決済みなのかを知りたかった。解決済みならどうやって?</p>	<p>何もありません。ありがとうございました。</p>	<p>他の活動場所と比べ、多摩川下流は整備が進んでいないことが判ったが、できれば自然のままの状態で子供たちが裸足になれるような状態として残したいと同僚と話合っていた。</p>

4-2. シンポジウムの波及効果

シンポジウム実施後、本企画の継続実施について、次回開催に向けた協力・参加の意向を尋ねたところ、協力いただきたいずれの団体からも賛同の声が集まり、現在ほかの活動団体も含めた次回開催を計画している。

また本シンポジウムから派生した活動として、同会の活動報告を行う展示会(二ヶ領せせらぎ館、2021年5月)やパネル展示(大田区役所、2021年5月)の提案をいただいた。これら展示活動と合わせる形で、シンポジウムアンケートの回答にもあった本調査研究の成果を報告するウェブサイトの開設も行っている。

4-3. 本章の調査まとめ

本章の内容は、第3章と同じく研究計画の中で当初位置付けていた内容である、直接的な交流会の実施に対する代替的な研究活動であった。多摩川全体の活動団体を対象として実施することはできなかったが、コロナ発生の前後における活動内容の変化や地域とのつながり、子どもたちの様子の変化等を、活動主体と共に確認し、多摩川や水辺の活動の価値を捉え直す機会を設定することができた。

5. 考察とまとめ

5-1. 考察

本研究の大きなテーマは、流域連携の可能性を探ることであった。第2章における、子どもたちと多摩川を中心に据えた地域主体や水辺の活動間のこれまでの連携の把握では、かつてお互いの活動を支え合うつながりの形の一端を明らかにすることができた。しかし現在では自地域・コミュニティ内の活動や連携の深まりと同時に、広域的なつながりに対して注力する機会が希薄になっていることを、第3章、第4章における流域連携に向けた意識把握の部分で捉えてきた。これに対し、本研究では流域全体として活動の価値をスケールアップして捉え直していくことで、地域主体との新たな連携の形や多世代に渡る関心の広がりへとつなげることを企図し、多摩川オンラインシンポジウムを企画・実施した。

第4章で把握した多摩川オンラインシンポジウムに対する各活動主体の意向把握により、同シンポジウムは、他の水辺の楽校に対する意識、新たな形の流域連携に向けた意識を醸成する一つのきっかけにできたと考えられる。しかし、流域という広域的なスケールに対する個々人の意識や関心は、直接的な「多摩川の経験」として結びつけることは難しく、また同様に個別の活動を多摩川流域全体の中に位置づけることも容易ではない。したがって多様な観点、領野、スケールから継続的にこれらを捉えなおし、緩やかに形成していく必要があるものとする。

5-2. まとめ

(1) 当初計画内容における未達成事項

多摩川の水辺の活動の参与観察によって把握した内容を地図上で示しながら、活動間や地域主体とのつながりの形態を可視化することを、助成開始時には計画していたが、研究期間後半はコロナの影響により十分な調査が行えず、当初の計画通りに可視化して示すことができなかった。

(2) 今後に向けての課題

上記の未達成事項をフォローアップするため、継続的な調査とその成果の可視化を目的として、「多摩川オンラインシンポジウム」やこれを報告する「展示イベント（2021年5月実施）」、「水辺の活動の訪問記録（第2章で行った参与観察を2021年以降も実施予定）」を紹介し、多摩川の水辺の価値を探る「ウェブサイト（次項(4)の成果公表にて概要を紹介）」を開設した。今後の課題は、これら一つひとつのイベントや研究活動をそれぞれ関連させて一連のプロジェクトとしてまとめながら、各地域の市民一人ひとりの関心や多様な地域の主体の活動を多摩川に向けて、いかに相互に結び付けていくか、ということである。本報告書の中ですでに述べた通り、多摩川の水辺の活動に関わる一主体として介入しながらこの課題に取り組んでいきたい。

(3) 本調査研究・活動の結果の社会還元

次項(4)の成果公表の部分で記載するウェブサイトを活用しながら、本研究で行ってきた水辺の活動の参与観察を継続して行うと同時に、定期的に「多摩川オンラインシンポジウム」や「展示イベント」を開催することで、実際の水辺の活動団体間の連携を深めることに結びつける。これと同時に各地の市民や地域主体、活動団体に対しても情報発信等を行いながら多摩川の価値を多面的に捉える機会を創出し、各地域の自然と社会を様々なスケールで結びつけていきたい。これらにより一人ひとりの関心や個々の活動をスケールアップして価値づけることで、多摩川の自然環境の保全や地域社会の活性化の双方を促すことで還元していきたい。現段階では、本調査研究や活動を継続していくための基本的な土台をつくることができた。

(4) 本成果報告書以外の成果公表

本成果報告書以外の成果として公表しているものは下記の通りであり、概要と共に以下に示す(現在予定しているものも含む)。

論文：

(審査中)「平瀬川流域まちづくり協議会の活動展開からみる流域まちづくりの可能性」として日本都市計画学会・学術研究論文として投稿中である。投稿中の論文では、本研究で対象としているかわさき水辺の楽校の関連主体である「平瀬川流域まちづくり協議会」の25年以上にも渡る活動展開に着目し、多摩川の小流域単位でのまちづくりの可能性について論じた。

発表会・報告会：

(実施中) NPO 法人多摩川エコミュージアムとの協力のもと、第1回目の多摩川オンラインシンポジウムの報告と共に、多摩川に向けられた他の水辺の活動団体や地域住民の方々の活動や想いをアートとして表現する展示会を「未来のカップたちにわたすたまがわ」と題して開催(場所：二ヶ領せせらぎ館、期間：2021年5月1~30日)。

ウェブサイト：

本報告書で取り上げた多摩川オンラインシンポジウムについての情報発信と共に、エコロジカル・デモクラシー財団と東工大有志メンバーによって展開する一連のプロジェクト(「多摩川かっぱプロジェクト」と題して、継続的に水辺の活動訪問やシンポジウム、展示会等の実施を行いながら多摩川流域の様々な連携の形を模索する)の活動を紹介するウェブサイトを開設し公開している。同ウェブサイトが多摩川の水辺の活動の情報発信プラットフォームとして活用することを企図しながら運用する。

多摩川かっぱプロジェクト HP：<https://ecodemotamagawa.wixsite.com/website>

参考文献

- 1) 六宮章宣、土肥真人 (2003) 「多摩川水系河川整備計画策定プロセスにみる社会空間形成における河川の可能性」 日本造園学会ランドスケープ研究
- 2) Kei SAKAMURA, Teppei OYA, Norihiro NAKAI, Mamiko NUMATA. (2017) “Supporting Local Communities through Current River-Based Management and Educational Projects and Exploring the Potential for Watershed-Scale Partnerships” International Conference of Asian-Pacific Planning Societies
- 3) 山道 省三 (2010) 「多摩川における川と地域の交流拠点に関する調査・研究」 公益財団法人とうきゅう環境財団, 研究助成・一般研究 VOL.32, NO.191
- 4) 土肥真人訳、ランドルフ・T・ヘスター著 (2018) 「エコロジカル・デモクラシー：まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン」 鹿島出版会
- 5) 土肥真人 (2018) 「コミュニティー・デザインからエコロジカル・デモクラシーの都市デザインへ」 『BIOCITY No.74 特集エコロジカル・デモクラシーのデザイン：世界をつなぐ 15 の原則』 株式会社ブックエンド、pp10-19
- 6) 武田丈 (2015) 「参加型アクションリサーチ(CBPR)の理論と実践—社会変革のための研究方法論」 世界思想社

水の循環と子どもの遊びからみる自然と社会とのつながりとその価値について
—多摩川流域の自然環境保全に向けた流域連携の可能性に向けて

(研究助成・学術研究 VOL. 50—NO. 361)

著 者 土肥 真人

一般財団法人エコロジカル・デモクラシー財団・代表理事(採択当時)

発行日 2021年12月

発行者 公益財団法人 東急財団

〒 150-8511

東京都渋谷区南平台町5番6号

TEL (03) 3477-6301

<http://foundation.tokyu.co.jp>